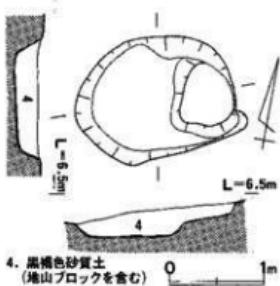


建設省新庁舎建築に伴う

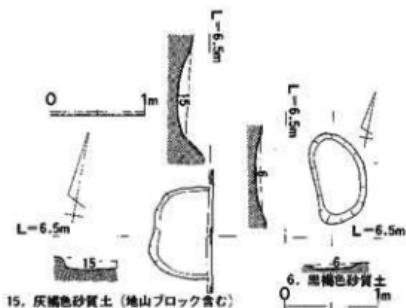
天神遺跡発掘調査報告書IV

1986年3月

出雲市教育委員会

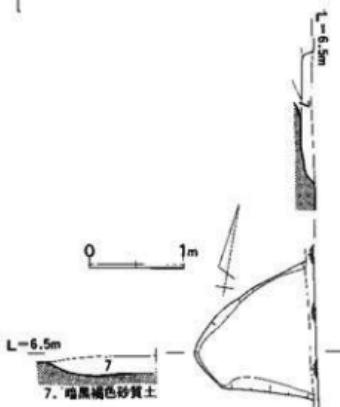


第22図 SK04実測図

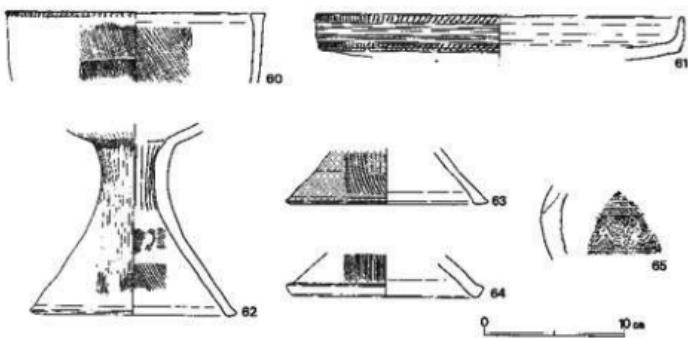


第19図 SK01実測図

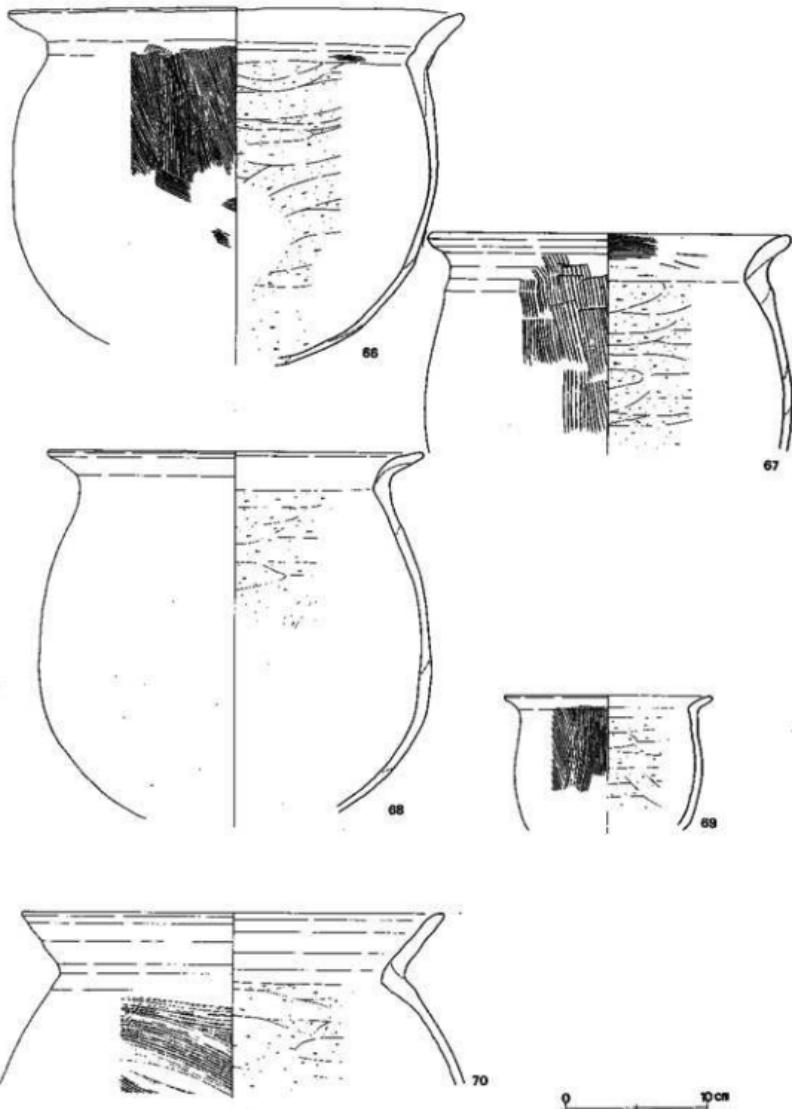
第20図 SK02実測図



第23図 SK05実測図



第35図 弥生土器実測図(5)



第36図 土師器実測図

建設省新庁舎建築に伴う
天神遺跡発掘調査報告書IV

1986年3月
出雲市教育委員会

はじめに

天神遺跡は、出雲市天神町一帯の広範囲に遺物が散布する周知の大遺跡で、昭和47年の発掘調査以来、数度にわたって発掘調査が実施されています。

このたび、遺跡の範囲内に建設省出雲工事事務所の新庁舎が建築されることになり、緊急に発掘調査を実施いたしました。調査の結果、弥生時代を中心とする多くの溝などが判明し、また、遺物としては、土製丸玉や碧玉製管玉などが出土するなど、これまでの数度の発掘調査とはやや性格を異にする成果が得られましたことは、天神遺跡の実態を究明するうえで、新しい展望がひらけたものと確信しております。

本書が、今後の文化財の保護に活用され、また、研究の資料として役立てば幸いに存じます。

本調査にあたりご指導賜りました先生方にお札を申し上げるとともに、厳しい自然条件のもとで発掘調査をお世話になった調査員や作業員の皆さん、また、ご協力いただきました関係各位に心から感謝いたします。

昭和61年3月

出雲市教育委員会

教育長 石 飛 満

例　言

1. 本書は、天神遺跡のうち、建設省出雲工事事務所新序舎建築に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、建設省中国地方建設局出雲工事事務所の委託を受けて、出雲市教育委員会が昭和60年12月27日から昭和61年1月25日まで実施した。
3. 調査体制は次のとおりである。

調査員	角田徳幸（島根大学専攻科学生）、川上稔（出雲市教育委員会社会教育課主事）
調査補助員	手銭弘明、伊田喜浩、佐藤雄史、大谷晃二（以上島根大学学生）
事務局	今岡清（出雲市教育委員会社会教育課長）、来海弘明（同文化係長）
4. 調査にあたっては、地元各位をはじめ、建設省出雲工事事務所、中筋組の協力があり、島根大学の田中義昭教授からは発掘調査のご指導をいただいた。
5. 本書の編集・執筆は主として角田が担当し、図面の一部については島根大学学生諸氏の協力があり、土器洗浄、注記等については、柳栄教子、山本信子の両氏がこれにあたった。
6. 本書に掲載した図面の縮尺は、造構については1/30、1/60、1/80、1/120で、遺物については、1/2、1/4である。
7. 本調査の出土遺物は、出雲市教育委員会で保管している。

目　次

1. 調査に至るまでの経緯	4
2. 位置と歴史的環境	5
(1) 位 置	5
(2) 歴史的環境	6
(3) 4次の発掘調査と造跡の範囲	7
3. 造 構	10
(1) 造構の概要	10
(2) 溝状造構	13
(3) 土壌状造構	24
(4) その他の造構	27
4. 遺 物	29
(1) 弥生土器	29
(2) 土師器、須恵器、他	35
(3) 土製丸玉、管玉、手捏土器	38
(4) 土器觀察表	39
5. 小 結	45

挿 図 目 次

第1図	天神遺跡と周辺主要遺跡分布図	5
第2図	調査区の位置と遺物散布地	8
第3図	天神遺跡表採土器実測図	9
第4図	遺構全体図	11~12
第5図	S D01実測図	13
第6図	S D02実測図	15~16
第7図	S D03、04実測図	17~18
第8図	S D05実測図	19
第9図	S D06実測図	19
第10図	S D07実測図	20
第11図	S D08実測図	21
第12図	S D09実測図	21
第13図	S D10実測図	22
第14図	S D11実測図	23
第15図	S D12実測図	23
第16図	S D13実測図	23
第17図	S D14実測図	24
第18図	S D15実測図	24
第19図	S K01実測図	24
第20図	S K02実測図	24
第21図	S K03実測図	25
第22図	S K04実測図	25
第23図	S K05実測図	25
第24図	土壤群周辺土器出土状況実測図	26
第25図	S K06実測図	26
第26図	S K07実測図	26
第27図	S K08実測図	26
第28図	S K09実測図	27
第29図	土師器甕出土状況実測図	27
第30図	S I01実測図	28
第31図	弥生土器実測図(1)	30
第32図	弥生土器実測図(2)	31
第33図	弥生土器実測図(3)	32
第34図	弥生土器実測図(4)	33
第35図	弥生土器実測図(5)	34
第36図	土師器実測図	36
第37図	土師器、須恵器、砥石、他実測図	37
第38図	土製丸玉、管玉、手捏土器実測図	38

1. 調査に至るまでの経緯

建設省中国地方建設局出雲工事事務所は、老朽化し手狭になった現庁舎（出雲市塩治町1,543番地）から市内塩治有原町に移転して新庁舎を建築することになり、開発に伴う緊急埋蔵文化財発掘調査として本調査は実施したものである。

11月下旬に、一市民から天神遺跡の一角において開発行為が行われようとしているとの情報を得たため、出雲市教育委員会が現地へ駆けつけ確認したうえで、当該開発事業の発注者である建設省中国地方建設局出雲工事事務所へ電話にて問い合わせたところ、庁舎の移転新築が判明した。そのため、昭和60年11月26日付で、出雲市教育委員会から、「埋蔵文化財の取扱いについて（通知）」を文書送付して、文化財保護法第57条の3に基く手続きが早急に必要である旨を通知した。

この件について、島根県教育委員会に連絡して協議した結果、とりあえず、庁舎建設予定地内を試掘調査を実施することになった。埋蔵文化財発掘調査通知書を提出のち、昭和60年12月16日に、島根県教育委員会の指導を得て、出雲市教育委員会が試掘調査を行なった。試掘調査は、 $2 \times 2\text{ m}$ のグリッドを10ヶ所設定したうえで1ヶ所ずつ順に慎重に行なった結果、新庁舎建築部分のうちの西側4ヶ所のグリッドから遺構や遺物が検出され、他のグリッドからは遺構、遺物は皆無であった。そのため、遺構、遺物の確認された建築部分の西半分を発掘調査することが決定した。当該地は、県立農業試験場の試験田として長らく用地使用がなされていたが、県立農業試験場が南の山麓に移転することによって廃田となった。以後、この地域は、出雲市の都市計画事業である土地区画整理事業により、試験田のうえに真砂土を50cm程度盛土をして、現状になっている。

発掘調査を実施するにあたり、出雲市教育委員会は、発掘担当者を探した結果、やっと、島根大学専攻科学生角田徳幸氏を調査員としてお願いすることができた。建設省出雲工事事務所との協議により、出雲市教育委員会が建設省からの受託事業として埋蔵文化財発掘調査を実施することになり、昭和60年12月25日には、両者により発掘調査委託契約書が締結された。

昭和60年12月26日に、発掘主体者である出雲市教育委員会の立ちあいのもと、重機により発掘地の盛土部分（地表から約50cm）を旧表土（県立農業試験場の試験田）まで除去したうえで、翌27日から埋蔵文化財発掘調査に着手した。発掘調査は、昭和61年1月25日までの約1ヶ月間、冬季の厳しい自然条件のもとで行なわれ、かなり困難ではあったが、関係者の協力によって無事終了した。

2. 位置と歴史的環境

(1) 位 置

天神遺跡は出雲市天神町及び塩治有原町を中心とする広範囲な地域に所在する複合遺跡である。現在では、山陰屈指の規模を有する出雲平野のほぼ中央に位置しているが、遺跡が形成され始めた頃の景観は、かなり異なっていたようである。

当時は平野の沖積が十分に進んでおらず、大社湾沿岸に形成された砂嘴によって入海のような状況を呈していた潟湖が相当広い水域を有していたものと考えられる。また、斐伊



第1図 天神遺跡と周辺主要遺跡分布図

1. 大寺古墳 2. 飛石墳群 3. 大寺东古墳 4. 上田古墳群 5. 地藏山古墳 6. 半分古墳 7. 上塙池根古墳
8. 大藏古墳 9. 桂木山古墳 10. 神原山古墳 11. 宇都古墳 12. 鹿野山古墳 13. 小原古墳

川は、西流して人海に注いでいたようだ。宍道湖の汀線も現在よりかなり西にあったものと思われる。このような地形の中で天神遺跡は神戸川の北岸、人海への河口に近い自然堤防上に占地しており、「出雲國風土記」が書かれた頃までは、少くとも、同様な景観であったと考えられる。

(2) 歴史的環境

天神遺跡が所在する出雲平野では数多くの遺跡の存在が知られている。その初源は縄文時代早期初頭の菱根遺跡に遡るが、これに続く遺跡は確認されていない。

縄文時代後期、晚期になると比較的安定して遺跡がみられるようになり原山遺跡や矢野遺跡、出雲大社境内遺跡、三反谷遺跡が知られる。特に前2者は弥生時代前期以降も継続して遺跡が営まれており、原山遺跡では北九州地方から直接的な影響の下に成立したと考えられる土器群が認められる等、当地域における稲作農耕の開始を考える上で注目される遺跡である。

弥生時代中期中葉になると、入海周辺の沖積地に集落が拡大を始め、天神遺跡、多聞院遺跡、山畠遺跡等、が成立する。集約的な農業経営が未成熟な段階においては、集落、耕地の拡大によって生産量の増大や人口圧への対処が図られたものと考えられる。また、矢野遺跡も含め、これらの遺跡の多くが貝塚を伴っていることは、農業経営自体まだ脆弱であったものと思われ、半農半漁的なあり方が想定されよう。弥生時代後期になると、山持川川岸遺跡や斐伊川鉄橋遺跡、石上手遺跡等が出現し、集落がさらに拡大する一方、四隅突出型墳丘墓6基を含む西谷墳墓群が平野南の丘陵上に築造される。この中には一辺40mを超える3分墓のようにかなり大形のものも含まれており、ある程度、治水灌漑や開発を行い得る共同体的結合が生まれていたことが窺える。

古墳時代になると平野の中心部では現在のところ前半期の古墳は知られていないが、北部に県内最古の前方後円墳とされている大寺古墳が存在し、西部には筒形銅器を出土して注目された山地古墳が築造される。集落遺跡としては、天神遺跡や宮松遺跡のように微高地に安定して営まれる遺跡も存在するが、その他の多くの低地に立地した遺跡はこの頃焼絶しており、新來の鉄製農耕具の普及等に伴った乾田開発によって、安定した地点に移動したものと思われる。後半期になると、神戸川両岸を中心に大念寺古墳、妙蓮寺山古墳、上塩治築山古墳等大形の横穴式石室を有する古墳が築造されている。また、丘陵斜面には上塩治横穴群や福知寺山横穴群等大規模な横穴群も知られており、経済的な基盤である農業経営も安定期を迎えていたことが推察される。

奈良時代になると神門寺境内庵寺や長者原廃寺といった私寺が建造されるが、伽藍配置

等詳しいことはわかっていない。また、周辺では小坂古墳の石櫃や朝山古墓、菅沢古墓、西谷古墓等で骨蔵器が発見されており、この地域でもいち早く火葬が採用されていることは興味深い。

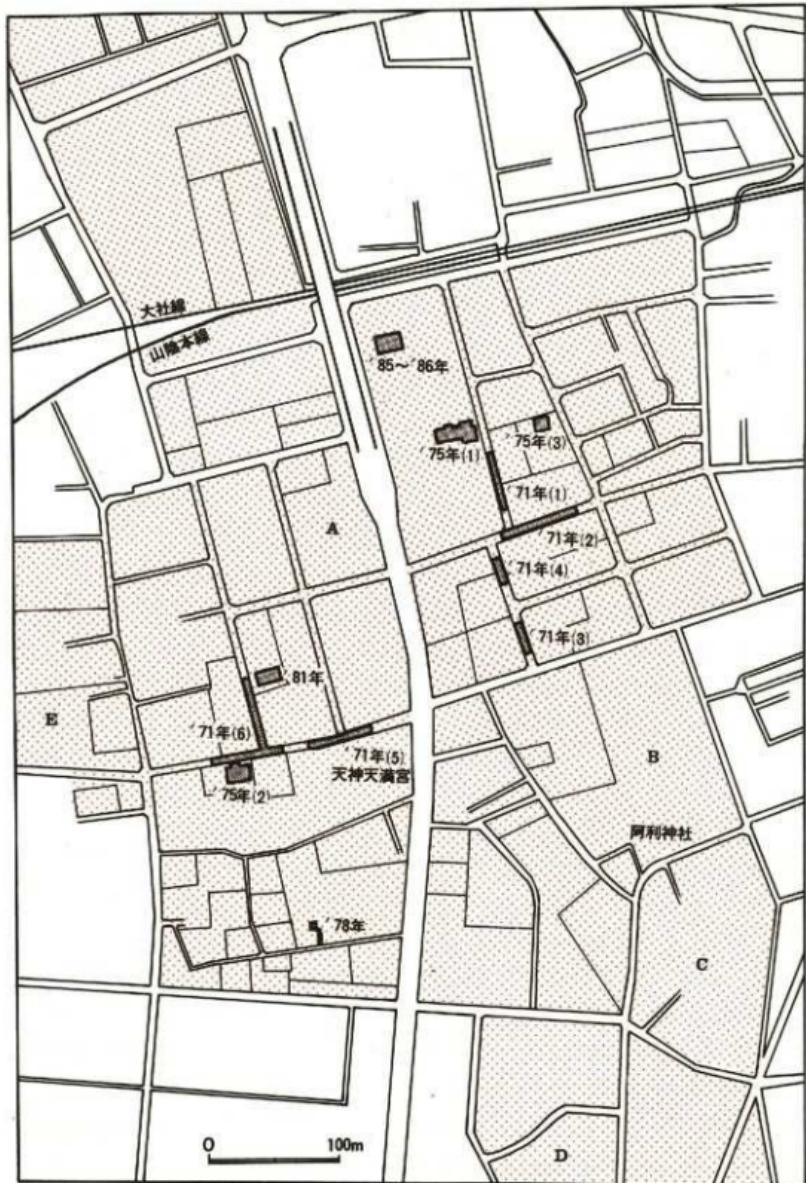
(3) 4次の発掘調査と遺跡の範囲

天神遺跡では、これまでに種々の開発に先立って3度の調査がなされており、出雲考古学研究会による自主発掘も1度行なわれている。

⁽¹⁾ 1971年の調査は海上地区土地区画整理事業に伴って、6ヶ所で行なわれた。第1調査区では弥生時代中期後半の壺棺墓が発見され、長さ約1.5m、深さ0.5mの墓壙の中に器高58cmの壺が横にして埋納されていた。第2~4調査区では弥生時代中期後半と古墳時代後期の溝状遺構が検出されており、第2調査区からは銅齒文のある石製紡錘車が出土している。第5、6調査区では奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡2棟以上や溝、柵状遺構が検出されている。中でも第6調査区の掘立柱建物跡の柱穴は径70cm、深さ40cmと大形で、また、付近で墨書き土器が出土していることから、官衙跡である可能性が指摘されている。

⁽²⁾ 1975年の調査は島根医大教職員宿舎建設に先立って行なわれ、3ヶ所が発掘された。第1調査区では弥生時代中期中葉の土壙墓群、溝状遺構、及び古墳時代後期の溝状遺構、土壙が検出された。弥生時代中期中葉の土壙墓は2群に分れて営まれており、調査区中央北寄りに8基が密集して、東半部に6基が分散して存在した。これらの土壙墓に伴う土器はいずれも破片で壙底より浮いた状態で出土し、その時期も短期間に相次いで营造されたものと考えられている。また、溝状遺構の中には「コ」字形を呈するものがあり、方形周溝墓である可能性も指摘されている。第2調査区では6本の溝状遺構と、6棟の掘立柱建物跡が確認され、そのうち3棟は奈良時代を下限とするものであった。これらの建物の柱穴は径1~1.2mと大形で、縦柱のものも含まれており、倉庫等、官衙的色彩の濃いものであることが確認された。

⁽³⁾ 1978年の調査は天神遺跡周辺の開発の波から遺跡を守るために、その性格を捉えることを目的に出雲考古学研究会によって行なわれた自主発掘で、天神天満宮南側の3ヶ所で行なわれた。B-1区では古墳時代中期の土器窪と平安時代頃の掘立柱建物跡が確認された。土器窪は高环、窪に赤色顔料が塗布され、暗文が施されたものが多く、周辺から土製丸玉や同勾玉が出土していることから祭祀性の強いものと考えられている。また、掘立柱建物跡は南北方向に並ぶ80cm~100cmの大形柱穴を有しており、同区から綠釉陶器の出土をみていることから、官衙的なものである可能性が指摘されている。A-2、4区では溝状



第2図 調査区の位置と遺物散布地

遺物散布地

発掘調査区

構、柱穴が確認されているが、その時期、性格は不明とされている。

(4)
1981年の調査は建設省職員宿舎建設に伴なって行なわれ、奈良時代のものと推定される掘立柱建物跡2棟、鎌倉時代末から室町時代にかけてのものと思われる掘立柱建物跡1棟及び溝状遺構、土壌が検出されている。特に中世の建物跡は周囲を溝で区画していたことが注目され、溝の配置からみて2棟以上の存在が想定されている。同種のものは'71の調査でも確認されており、遺跡西側の一画には中世の建物群が存在することが明らかとなった。

以上の発掘調査の結果、本遺跡は弥生時代中期から中世に至る多種多様な遺構をもつた大複合遺跡であることが判明した。しかし、調査範囲が極めて限られているため、全容が明らかになっているところはなく、継続的な調査が望まれる。遺跡周辺では、現在も急速に都市化が進行しており、遺跡の破壊も心配されるので、ここで土器の散布状況を紹介し、注意を喚起しておきたい。

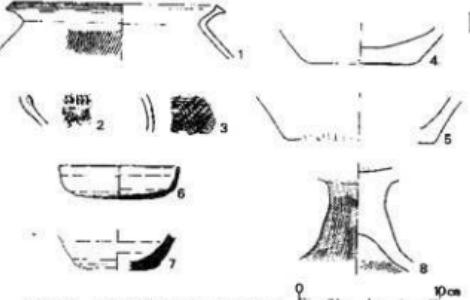
天神遺跡の所在する微高地には広範囲に遺物の散布が認められる。A地点周辺では弥生土器底部（第3図4、5）や土師器、須恵器が採集された。

B地点は小片が多いが、弥生土器、土師器、須恵器がある。（2）は甕の頸部で弥生中期後葉にあたるものと思われる。（3）は胴部で、外面に斜行刺突文を施し、内面はナデ調整を行なっており弥生中期のものと考えられる。

C地点では弥生土器、土師器、須恵器、土製支脚がみられた。（1）は甕の口縁部で口唇を肥厚させ、2条の凹線を入れており、弥生時代中期後葉のものと思われる。（6）は小形の环身で口縁はやや内湾気味に立ち上がり、底部に回転ヘラケズリを施す。（8）は高环脚部で脚部外面、上部内面に赤色顔料が塗布されている。古墳時代後半期のものと思われる。

D地点周辺では遺物散布の中心は須恵器であった。（7）は甕等の底部と思われ、調整は回転ナデである。古墳時代後期のものと考えられる。

E地点周辺では小片が多いが、少量の弥生土器の他に、高台の付く須恵器环、土師器が認められた。官衙と想定される遺構の西側にあたり、関連する遺構の存在も考えられよう。



第3図 天神遺跡表採土器実測図

A地点(4.5) B地点(2.3) C地点(1,6,8) D地点(7)

3. 遺構

(1) 遺構の概要

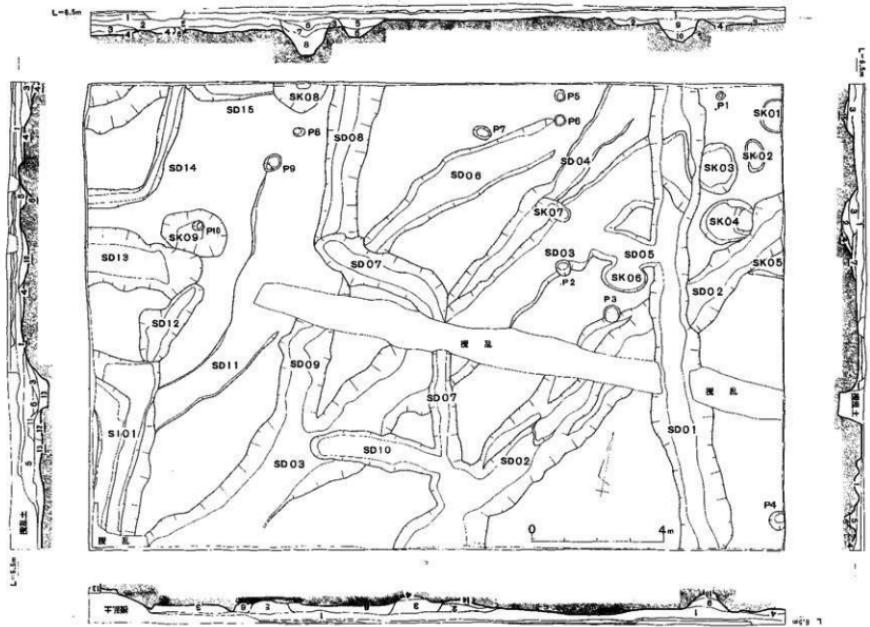
調査地は出雲市塩治有原町5丁目1、6、7、8番地である。この地点は調査時には遊休地となっていたが、以前は島根県農事試験場の試験田であった。

調査区は旧試験田の上層に客土された真砂土を重機で除去した後、21m×14mの範囲に設定し、その中に7m四方のグリッドを6個設けた。

遺跡を構成する層序は基本的には、水田耕土層、暗褐色土層、黄褐色砂質土層となっている。暗褐色土層は遺物包含層で遺跡全体を覆っており、地山の高くなる調査区南東側では耕作のため、比較的層が薄くなっていた。黄褐色砂質土層は自然堤防の基層である砂礫層の上に堆積しているもので、本遺跡の地山である。

遺構は溝状遺構15、土壌状遺構9、竪穴住居状遺構1、ピット状遺構10が検出された。溝状遺構は南北方向に伸びるS D01と、北東から南西方向に伸びるS D02、S D03といった大形の溝を中心に、小形の溝が複雑に切合っており、一部にはその前後関係が十分に確認できない所もあった。また、溝の平面形や断面形は多様で、直線状のもの（S D01、02、03等）や、L字形に曲るもの（S D07、14等）U字形断面を呈するもの（S D08）や断面が2段になるもの（S D02）等があり、その性格は各々異っていたものと思われる。土壌状遺構は調査区北東で密集して検出された6基が弥生時代の土壌墓群になるものと考えられるが、その他は性格を推定するまでには至らなかった。竪穴住居跡状遺構としたS I01は調査範囲が限られていたため、断定はできないが、平面形が方形を呈し、床面に側溝様のものが認められること、また、竪の把手等が出土していることからその色彩が強いものと思われる。また、S I01の北側にあるS D14は、形状の点で、建物跡に付随する側溝のようにも思われ、調査区西侧は集落跡の一画である可能性も考えられよう。ピット状遺構は規模の小さいものが多く、その配列をみても建物跡に伴うものとは判断されなかつた。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、砥石等があるが、特に弥生土器が多く、溝状遺構内や東北の土壌墓群周辺で多量に検出された。土師器では調査区西南で大形の甕3個体が潰れたような状態で出土している。また、調査区東北では羽玉製管玉や土製丸玉、手捏土器といった特色ある遺物も発見された。



第4図 透構全体図

1. 喀褐色土
2. 喀灰褐色土
3. 底褐色砂質土
4. 黑褐色砂質土（地山ブロックを含む）
5. 淡黒褐色砂質土
6. 黑褐色砂質土
7. 喀黑褐色砂質土
8. 黑色粘質土
9. 喀茶褐色砂質土
10. 淡灰褐色砂質土
11. 黄褐色砂質土
12. 黄色粘質土
13. 黑色土（地山ブロックを含む）
14. 喀灰褐色砂質土（地山ブロックを含む）
15. 底褐色砂質土（地山ブロックを含む）

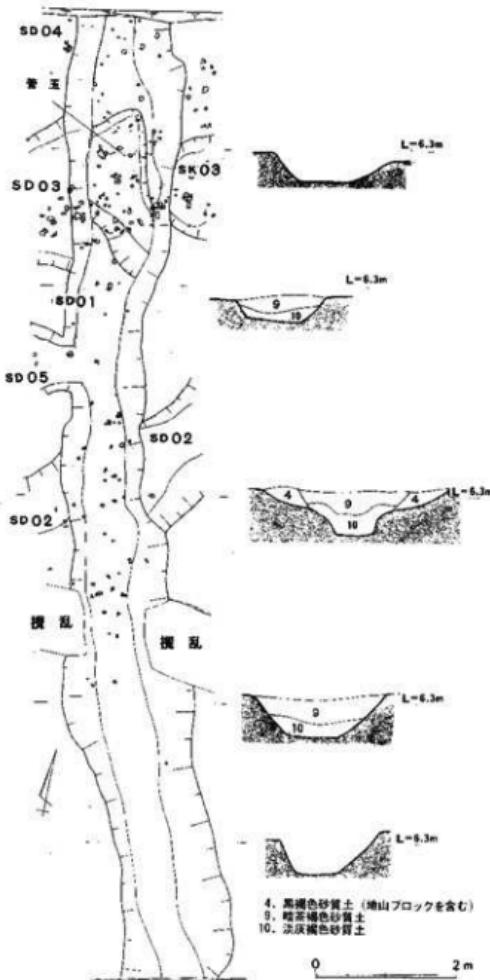
(2) 溝状遺構

1) SD01

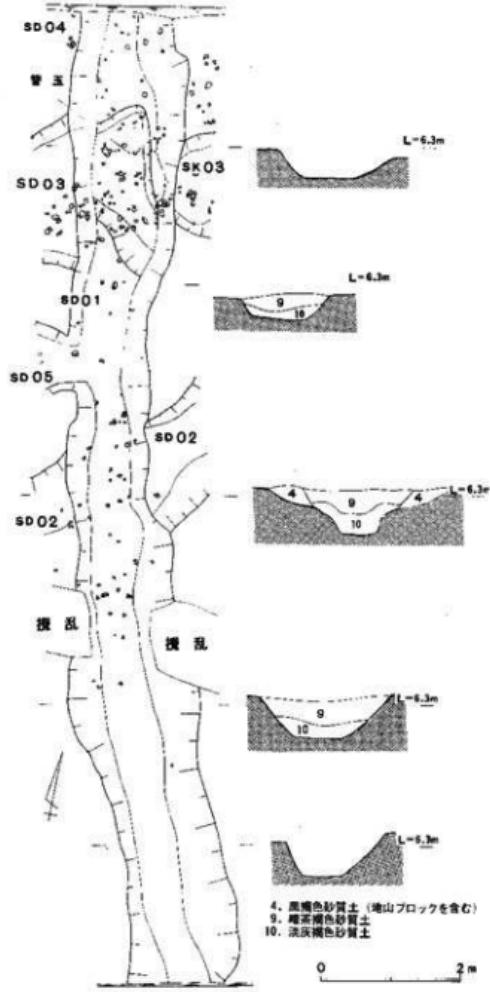
南北方向に伸びるもので、南側でやや東に曲がる。長さは調査範囲が限られているため明らかでないが、幅は1.9~1.1m、深さは0.6~0.36mを測る。断面形は底が平坦でやや内湾して立ち上がる形を呈する。底面の高さは若干の変化はあるが、ほぼ水平である。また、北側底面には長さ2.4m、幅0.8m、深さ0.2m程度の不整形な落ち込みがある。

SD01はSD02、03、04、05、SK03との切合関係がある。SD02との関係はその埋土である黒褐色砂質土層を切ってSD01が掘り込まれているため、SD02→SD01となる。また、SD04との関係はその埋土である暗灰褐色砂質土層を切ってSD01が掘り込まれており、SD04→SD01である。SD03、05との関係は不明であるが、SK03との関係はSK03→SD01となる可能性が強い。

出土遺物としては、弥生土器壺、甕片が多く、若干の須恵器甕片も含まれていた。いずれも小片が多く、埋土中より検出された。また、底面北側の落ち込みからは菅玉1個が出土している。



第5図 SD01実測図



第5図 SD01実測図

2) S D02

北東から南西方向にはほぼ直線的に伸びるものである。長さは不明であるが幅は2.2~1.1m、深さは0.56~0.24mを測る。断面形は場所によって異なっているが、調査区中央付近は2段掘りで、他は底がやや平坦になる素掘りものである。底面の高さは若干の変化はあるがほぼ水平である。また、中央の底面には幅0.5m、深さ0.2mの不整形な落ち込みがある。

S D02はS D01、10、S K04、05と切合関係がある。S D10との関係はS D02の埋土である灰褐色砂質土層及び黒褐色砂質土層をS D10が切っており、S D02→S D10となるものと思われる。S K04との前後関係はS D02→S K04である。また、S K05との関係はS D02の埋土である暗灰褐色砂質土層、灰褐色砂質土層、黒褐色砂質土層をS K05が切っておりS D02→S K05となる。出土遺物としては弥生土器の小片が多いが、中央部の埋土上層から手探土器も検出されている。

3) S D03

北東から南西方向にはほぼ直線的に伸びるものである。北東端ではS D01と切合しているが先端はこの付近にあったものと思われる。南西端は調査区外であり、長さは不明である。幅は2.36~1.4m、深さは0.3~0.2mを測る。断面形は底の平坦面が広い素掘りのもので、底面の高さは若干の変化はあるが、ほぼ水平である。

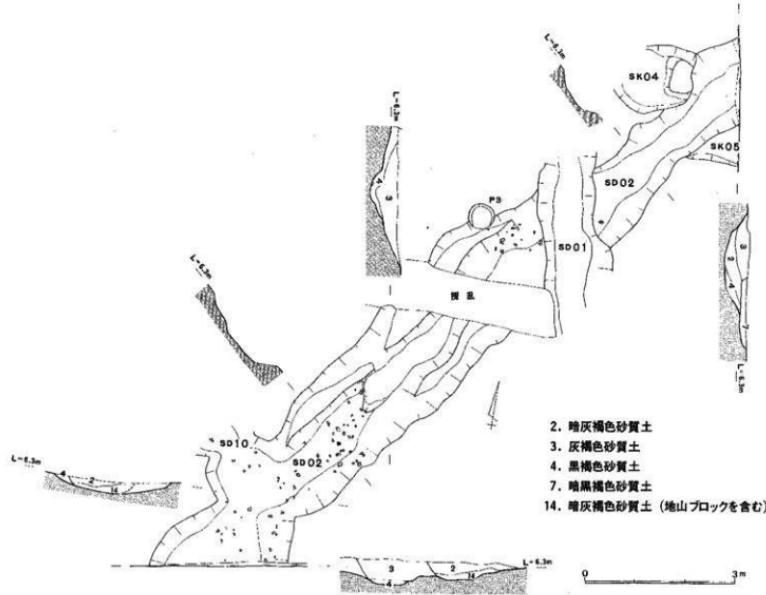
S D03はS D01、04、05、07、09、10、S K07と切合関係がある。S D04との関係はその埋土である暗灰褐色砂質土層をS D03が切っており、S D04→S D03である。S D07との関係はその埋土である淡黒褐色砂質土層と黒褐色砂質土層をS D03が切っており、S D07→S D03の順になる。S D10との関係はS D03の埋土である灰褐色砂質土層がS D10によって切られており、S D03→S D10である。S D01、05、08、との関係は明らかにできなかった。S K07との関係はS D03→S K07となる可能性が強い。

出土遺物としては小片となったものが多いが弥生土器壺、壺、高环片があり、溝北東側では土製丸玉1も検出された。土製丸玉はこの他にもS D03上面で2個が発見されている。また、円礫や角礫も各1個が出土した。出土遺物の中には、溝の深きが浅いこともある、底面に密着して検出されるものも多かった。

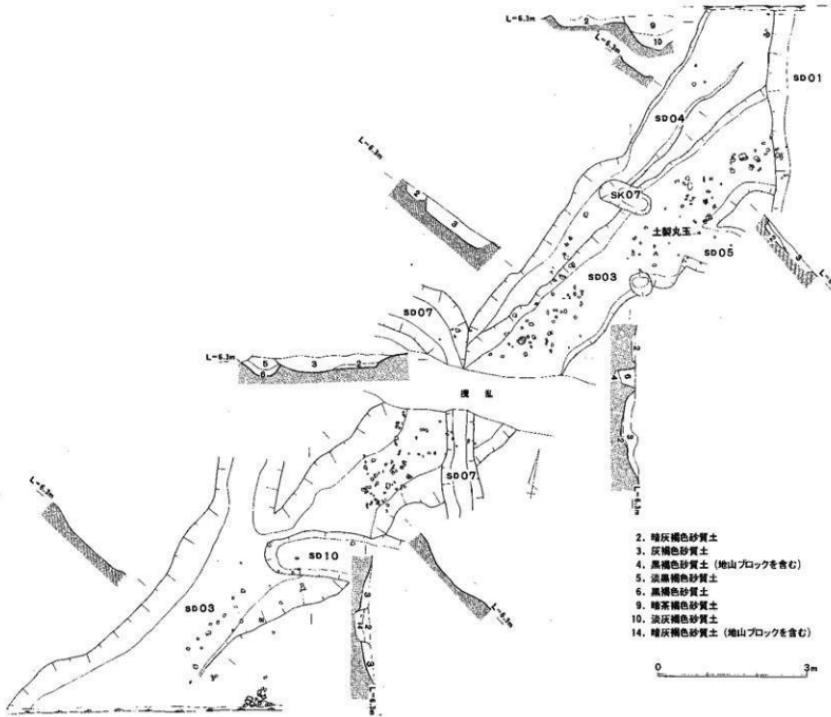
4) S D04

北東から南西にはほぼ直線的に伸びるもので、南西側でS D03に重なる。長さは不明であるが、北東調査区外でS D01に重なるものとすれば10m程度と推定される。幅は北東に行く程広がっており、1.1~0.6m、深さは浅く約0.1mである。

出土遺物としては小片となっているものが多く、弥生土器壺片等が検出された。



第6図 SD02実測図



第7図 SD03、04実測図

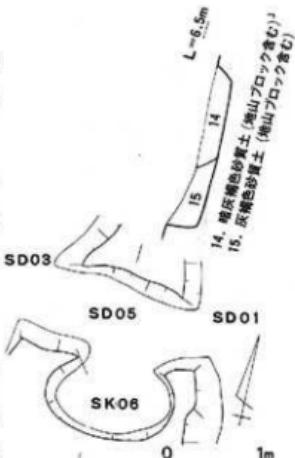
5) SD05

SD01、03間に東西に検出された小形のもので、溝状遺構ではなく土壤状遺構になる可能性もある。長さは南辺で1.9m、幅1.0~0.8m、深さ0.2mを測る。

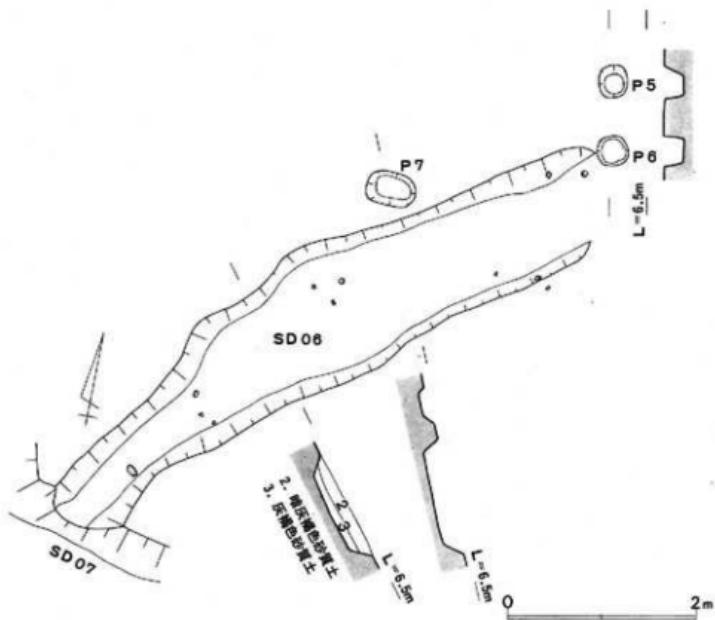
SD05はSK06と切合関係があり、SK06の埋土である灰褐色砂質土層をSD05が切っており、SK06→SD05といふ順になる。SD01、03との先後関係は明確にすることSD03ができなかった。

6) SD06

北東から南西方向に伸びるもので、やや北側に湾曲している。長さは現状で6.8m、幅1.5~0.7m、深さ0.2mを測る。断面形は底の平坦面が広い素掘りのもので、底面の高さは北東から南西方向にやや傾斜する。



第8図 SD05実測図



第9図 SD06実測図

S D06はS D07と切合関係があり、S D06→07となる可能性が強いものと思われる。また、この溝の周囲にはP 5～P 7のピット3個が確認されたが、その関連は不明である。出土遺物としては壺等、少量の弥生土器片が検出された。

7) S D07

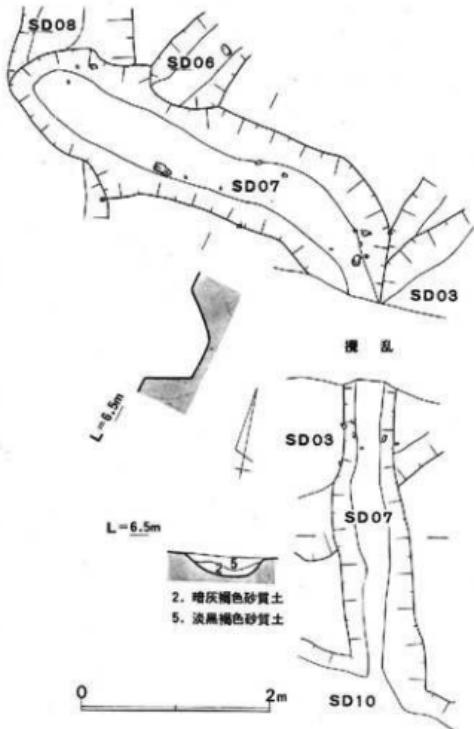
北西から南へ曲がり、南北方向に伸びるL字形のものである。S D10に南端を切られており、正確な長さは不明であるが、現状では長さ9.0mを測る。幅は中程でS D03に切られているため狭くなっているが約1.0～0.7m、深さは0.4mである。断面形は底の平坦面がやや広くなる形をとり、内湾して立ち上る素掘りのものである。底面の高さは北西から南側にかけてやや傾斜する。

S D07はS D03、06、08、10と切合関係を有している。前述のようにS D03との関係はS D07の方が古く、S D06との関係はS D07の方が新しい可能性が強い。また、S D10との関係はS D07→S D10の順となり、S D08との関係はS D07→S D08となるものと考えられる。

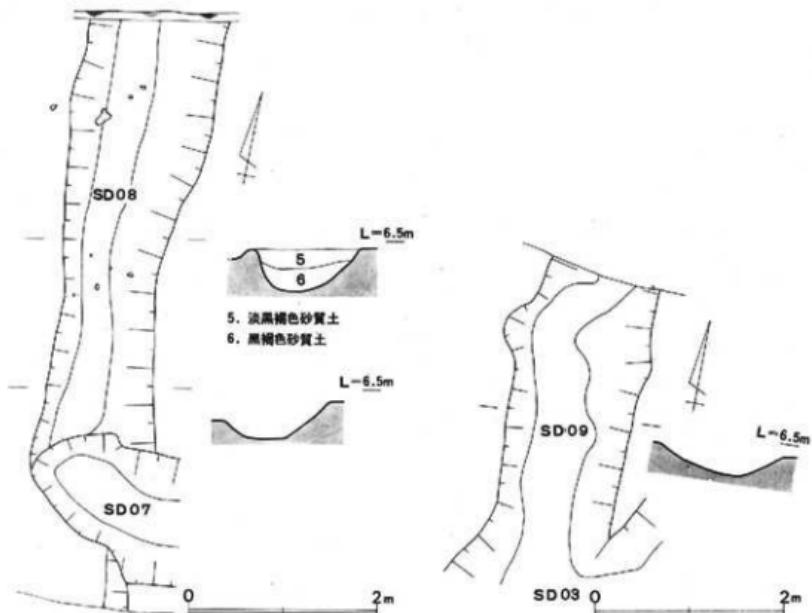
出土遺物としては、弥生土器壺、甕等、小片が多くかった。溝北西側のところでは、比較的扁平な石も検出されたが、遺物の多くは埋土中に含まれていた。

8) S D08

南北方向に直線的に伸びるものである。調査範囲が限られており長さは不明であるが、幅1.5～1.0m、深さ0.4mを測る。断面形はU字形を呈し、底面の高さは北側でやや下がる傾向をもつている。



第10図 SD07実測図



第11図 SD08実測図

第12図 SD09実測図

SD08はSD07と切合関係を有しており、前述のようにSD07が古いものと思われる。出土遺物としては、弥生土器の小片と扁平な石が埋土中より検出されている。

9) SD09

南北方向に直線状に伸びるものであり、SD08に連接する可能性もある。南端をSD03と接しており、正確な長さは不明であるが、現状では2.8mを測り、上記の可能性を想定するなら、調査範囲内では10.2mとなる。幅は1.6~1.2m、深さは0.4mを測る。断面形はU字形を呈しており、底面の高さは若干の変化はあるが、ほぼ水平で、SD08に比較すれば10cm程度高い。

SD09はSD03と切合関係を有しているが、その新古は明確にできなかった。出土遺物は少なかったが、底面より浮いた状態で須恵器蓋坏が検出された。

10) SD10

北西から南へ曲がり、南北方向に伸びるL字形のものである。長さは不明であるが、幅1.1~0.8m、深さ約0.2~0.1mを測る。断面形は底面にやや平坦面を有する素掘りのもの

である。底面の高さは南へ行く程下がる傾向をもっている。

S D10はS D02、03、07と切合関係を有しており、その前後関係は前述の通りいずれもS D10が新しい。

出土遺物は少量であるが、弥生土器や中世の土鍋が検出されている。なお、南側ではS D03中の遺物との区別は困難であった。

11) S D11

北東から南西に伸びるもので、南側にやや湾曲している。長さは南端をS I01によって切られているため不明であるが、現状では8.8m、幅は北側で東の掘り方を欠いているが、1.6~0.9m、深さは0.1~0.15mを測る。断面形は底面が広く平坦になるもので、底面の高さは溝の中程が高い。

S I01との切合関係はS D11→S I01の順と考えられる。

12) S D12

北東から南西に伸びるもので、不整形な形を呈する。長さは南端をS I01によって切られており不明であるが、現状で2.8m、幅は1.3~0.7m、深さは0.3mを測る。断面形はU字形を呈し、底面は変化はあるがほぼ水平である。

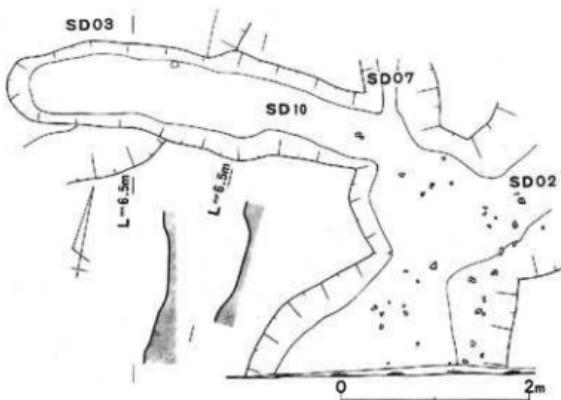
S I01との切合関係はS D12→S I01の順と考えられる。

13) S D13

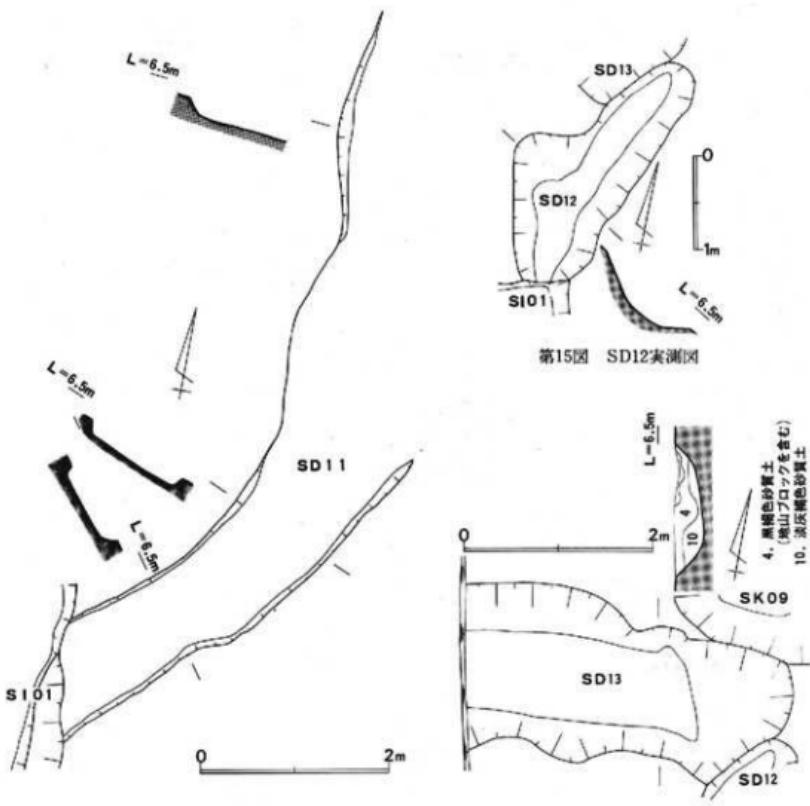
東西方向に伸びる直線的なものである。長さは不明であるが、幅は1.8~1.4m、深さは0.3mを測る。断面形はU字形を呈し、底面の高さは東側へやや傾斜している。

S D12、S K09と隣接しているが切合関係はなかった。

出土遺物は少量であったが弥生土器、土師器片が検出された。



第13図 SD10実測図



第14図 SD11実測図

第15図 SD12実測図

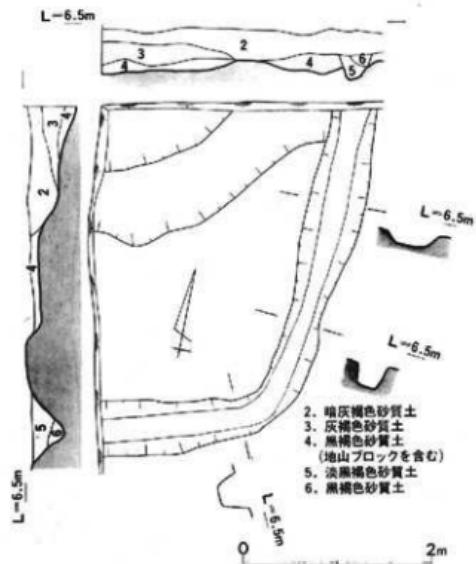
第16図 SD13実測図

14) SD14

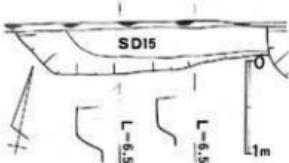
北東から屈曲し西方向に伸びるL字形のものである。長さは不明であるが、幅0.6~0.35m、深さ約0.3mを測る。断面形はU字形を呈し、底面の高さは北東方向がやや下がる傾向をもっている。

SD14に開まれた調査区北西隅には緩い傾斜の落ち込みがあるが、SD14はその埋土である地山ブロックを含む黒褐色砂質土層を切っており、この落ち込みより新しいものであることがわかる。

出土遺物は少なかったが、須恵器、土師質土器片が検出されている。



第17図 SD14実測図



第18図 SD15実測図

15) SD15

東西方向に伸びる直線的なもので、土壤等である可能性もある。長さはSK08と切合っており不明であるが、現状で2.7mを測る。幅も不明で、深さは0.3~0.2mを測る。底面の高さは若干の変化はあるがほぼ水平である。

SK08との切合関係はSD15の埋土である黒褐色砂質土層が切られており、SD15→SK08の順となる。

(3) 土壌状遺構

1) SK01

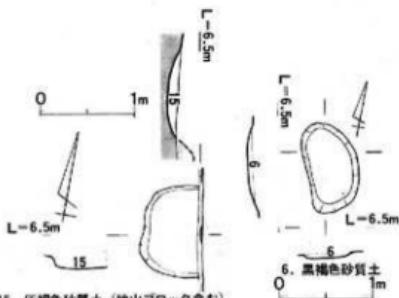
調査範囲が限られているため全容は不明であるが、隅丸長方形になるものと思われる。幅は約1.0m、深さは現状で0.1m程のものである。底面は平坦になっている。

出土遺物には土壤上面で弥生土器が検出されている。

2) SK02

南北方向に主軸をとるもので、不整な梢円形を呈する。長さ1.0m、幅約0.5m、深さは現状で0.1m弱であった。底面は平坦になっており、掘り方の傾斜は緩い。

出土遺物は土壤上面で弥生土器が少量検出された。



第19図 SK01実測図

第20図 SK02実測図

3) SK03

南北方向に主軸をとるもので、不整な楕円形を呈する。長さは1.5m、幅はSD01によって切られているため正確には不明だが約1.2m、深さは現状で0.15mを測る。底面は平坦になっており、掘り方の傾斜は緩い。

SD01との切合関係はSK03→SD01の順になる可能性が強い。

出土遺物としては土壌上面や埋土中から弥生土器が少量ではあるが検出されている。



第21図 SK03実測図

4) SK04

東西方向に主軸をとるもので、不整な楕円形を呈する。長さ1.7m、幅1.3m、深さ0.3mを測る。底面は平坦であるが、東側を1段高く掘り残す形をとっている。掘り方は比較的強い傾斜をもっている。

SD02との切合関係はSD02→SK04の順となる。出土遺物としては弥生土器少量が埋土中より検出された。

5) SK05

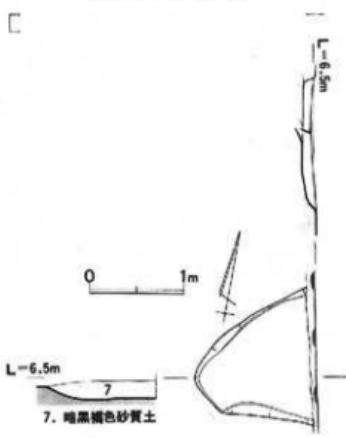
東西方向に主軸をとるもので、不整な楕円形を呈する。長さは不明であるが、幅1.5m、深さ約0.2mを測る。底面は平坦で、掘り方の傾斜は緩い。

SD02との切合関係はその埋土をSK05が切って造られており、SD02→SK05の順となるものと考えられる。

出土遺物としては埋土中より若干の弥生土器片が検出されている。

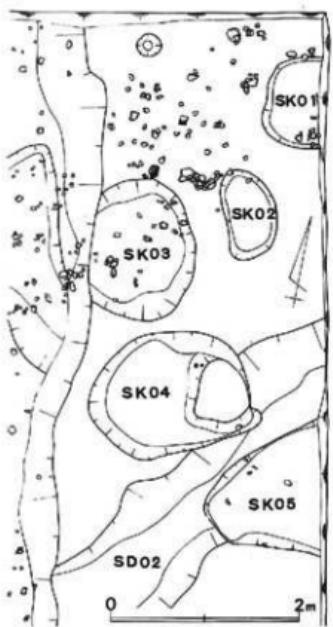


第22図 SK04実測図



第23図 SK05実測図

SK01~05の周辺では多量の弥生土器が検出されている。これらは土壌墓への供獻土器と考えられるが、SK02と03間より出土したほぼ1個体分にあたる壺片を除けば小片となっており、土壌周辺に散在



第24図 土壙群周辺土器出土状況実測図

7) SK07

東西方向に主軸をとるものであるが、ピット状のものになる可能性もある。長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.4mを測る。底面は平坦になっており、掘り方の傾斜は強い。

8) SK08

調査範囲が限られているため全容は明らかでないが、ほぼ円形になるものと推定される。径1.8m、深さは約1.0mを測る。土壙の断面形はU字形を呈し、底面は地山である黄褐色砂質土層下の灰色砂層に達していた。

S D15との切合関係はS D15→SK08の順になるものと考えられる。

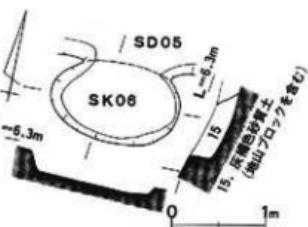
出土遺物は少なかったが、僅かに弥生土器片が確認された。

するようなあり方で検出された。また、S D01等の埋土中より発見された多量の弥生土器も、これらの土壙墓の供献土器であったものが、攪乱されて、混入した可能性が強いものと思われる。

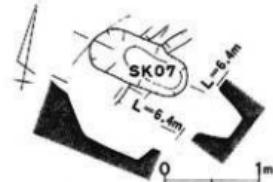
6) SK06

東西方向に主軸をとるもので、整った橢円形を呈する。長さは1.4m、幅はSD05と切合っており不明であるが、0.9m程度と推定され、深さは0.2mである。底面は平坦になっており、掘り方の傾斜は比較的強い。

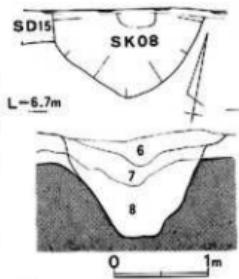
S D05との切合関係はSK06→S D05の順になるものと考えられる。



第25図 SK06実測図



第26図 SK07実測図



第27図 SK08実測図

9) SK09

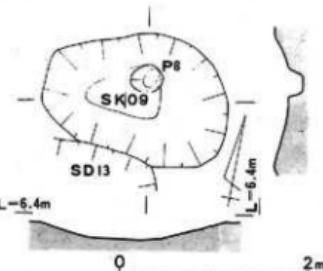
東西方向に主軸をとるもので、不整な楕円形を呈し、底面北側にはP8がある。長さは2.0m、幅1.4m、深さは約0.2mを測る。底面は狭く、掘り方の傾斜は緩い。

S D13と隣接しているが、切合関係は確認できなかった。

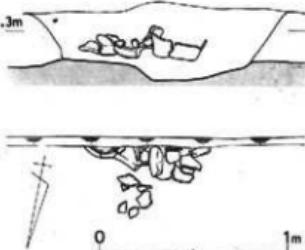
10) SK10

地山直上の黒褐色砂質土層より掘り込まれているため、土壤の平面形を確認することは困難であった。幅1.35m、深さは0.25~0.4mを測り、底面は東側が西側に比較して8cm程高くなっている。

出土遺物には、底面よりやや浮いた状態で土師器甕3個体が出土しており、そのうち1つはほぼ原形を知り得るものであった。土壤内への埋納のされ方は口縁を下にして置かれていた可能性が強い。



第28図 SK09実測図



第29図 土師器甕出土状況実測図

(4) その他の遺構

1) SI01

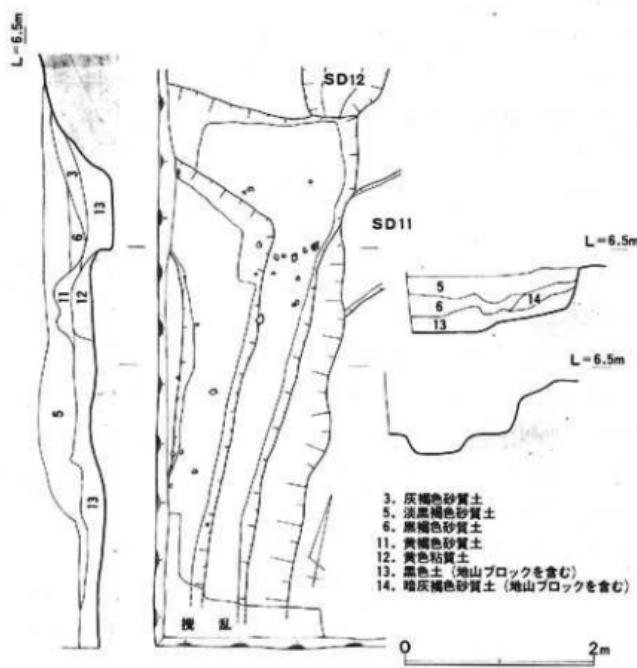
調査区が限られているため全容は不明であるが、方形プランを呈するものと思われる大きな落ち込みである。掘り方は東辺で2段となっているが、北東隅から北辺にかけては素掘りとなっており、壁はほぼ垂直である。床面にはL字形に曲る側溝も確認されており、幅60cm、深さ20cmを測る。

S D10、11との切合関係はS I01が両者を切っており、S D10、11→S I01の順となるものと考えられる。

出土遺物としては小片が多いが、弥生土器、土師器、須恵器、甕の把手等が検出された。なお、土師器片の中には内面に有機物の付着したものも認められた。

2) ピット

ピットは調査区全体を通して10個が検出された。大きさや深さにおいて柱穴と想定できるようなものは少なく、また、その配置も散在的であり、建物跡と考えられるものはなかった。



第30図 SI01実測図

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
径 (cm)	28	40~50	50	60	30	30	30~50	24~36	50	30
深さ (cm)	12	28	16	29	17	20	8	29	41	17

第1表 ピット計測表

4. 遺 物

(1) 弥生土器

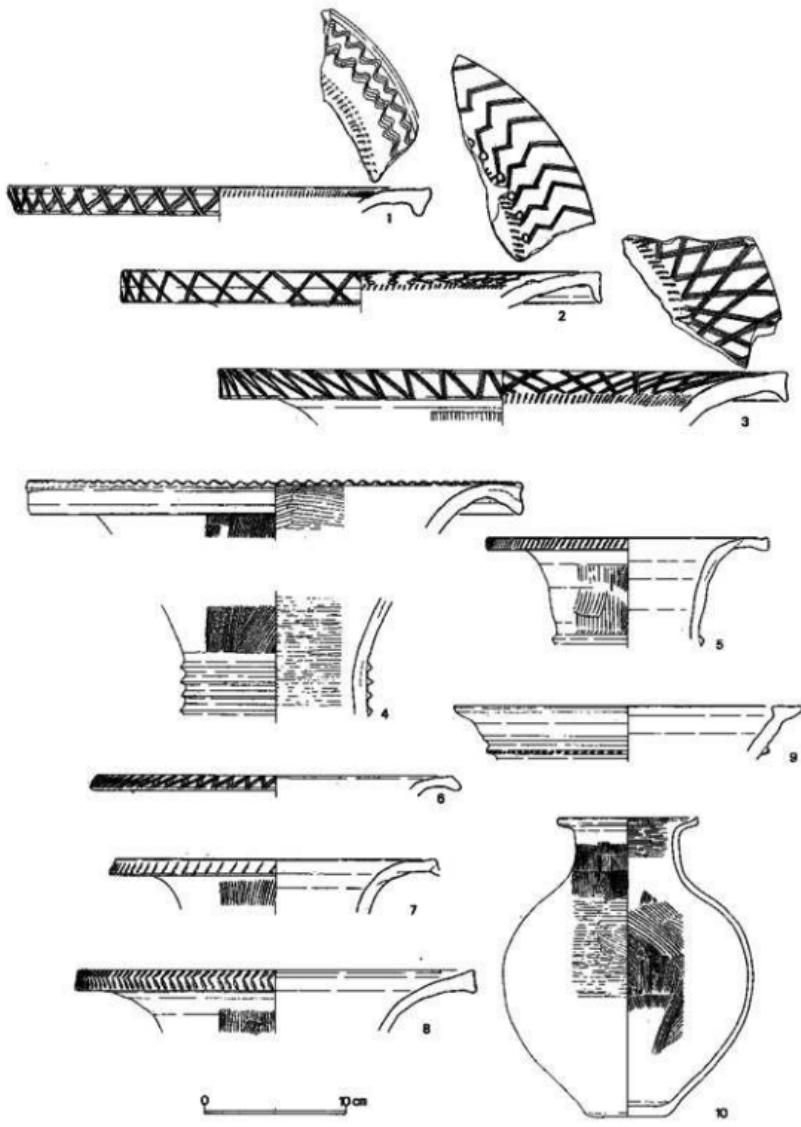
器種としては壺、甕、高杯がある。各遺物の出土地点は同一個体でも複数の造構にわたって接合できたものが多く、煩瑣になるので土器観察表に一括して示した。

壺の口縁は5種類に分類された。1～4は口縁部が大きく外反し、端部が下方に肥大するもので、内外面に多くの装飾を加えている。1は横ナデの後、口縁内面に波状文と斜行刺突文、外面に斜格子文を施す。2は横ナデの後、内面に連続羽状文、円形浮文、斜行刺突文、外面に斜格子文を入れ、頸部には縦方向のハケメ調整を行なっている。3は横ナデの後、内面に斜格子文と斜行刺突文、外面に山形文を施し、頸部は縦方向のハケメ調整を行なっている。なお、内面の一部に赤色顔料の付着が認められた。4は内面上端に指押えによる刻み目のある突帯が貼りつけてある。口縁外面下にはヘラケズリが施され、それ以下は縦方向のハケメ調整、内面にはヘラミガキが入いる。頸部には4条以上の突帯がある。5～7は外反する口縁を有するが、端部は下方にあまり肥大しないものである。5、7は口縁内外面に横ナデ調整を行い、端部にヘラ描きの斜行刺突文を入れる。頸部には縦方向のハケメ調整が施され、5は現状で1条の突帯をとどめる。6は横ナデの後、口縁外面に山形文を施す。8は外反する口縁を有するが、端部は上下に肥厚し、外面に羽状文を入れ、頸部に縦方向のハケメを施す。9は直線的に立ち上る口縁を有し、口唇は肥厚して上部に平坦面をつくり、頸部に刻み目の突帯を施す。調整は横ナデである。10は小形のもので、くの字形に短く屈曲する口縁を有し、端部をやや肥厚させる。肩のよく張る胴部を有し、底部は平底である。調整は内面口縁に横方向のヘラミガキ、胴部に縦方向のハケメ、外面は頸部に縦方向のハケメ、胴部に横方向のヘラミガキを施す。

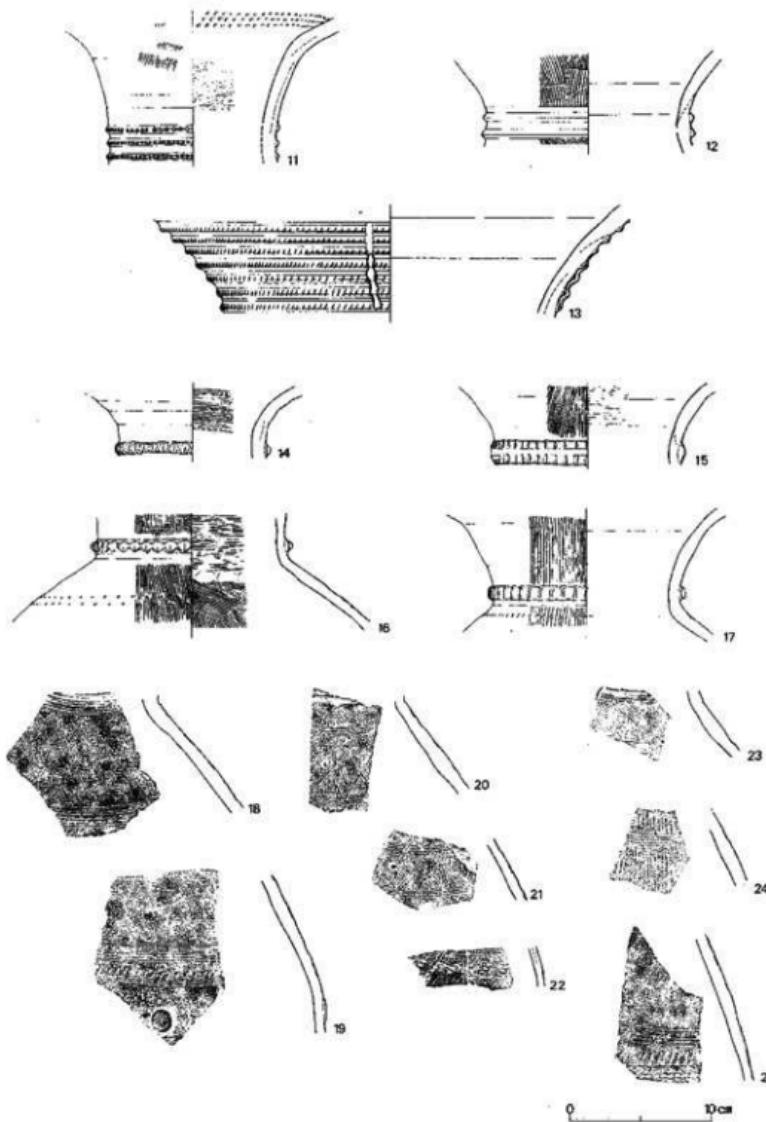
頸部は2つに分類できる。11・12・14～17は外反しながら立ち上がり、朝顔形に開く口縁に至るものと思われ、外面は縦方向のハケメ、内面は11・15～17に横方向のヘラミガキ調整が行なわれる。13は外面に幾条もの突帯を施しながら、外反して立ち上り、やや肥厚する口唇に至るものと思われる。

頸部にめぐる突帯には5種類が認められる。4・5・12は粘土帯を貼り付けて横ナデ調整を施したのみの無文のものである。9・11・13は細い刻み目をつけてたものである。14・15・17は工具によって幅のある刻み口を施したもので、15は1つの突帯に2段に入れられている。16は指頭圧痕文帶である。

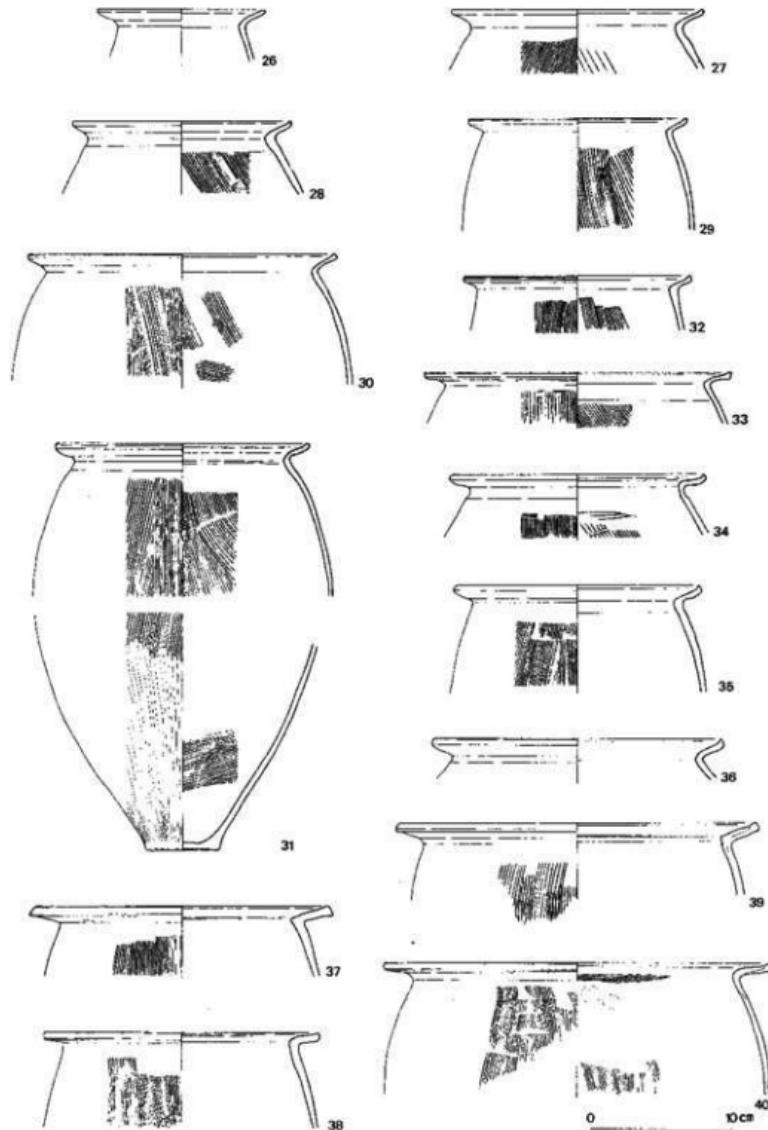
胴部は縦方向のハケメ調整のち、斜格子文を主体とした装飾を加えている。18・19は



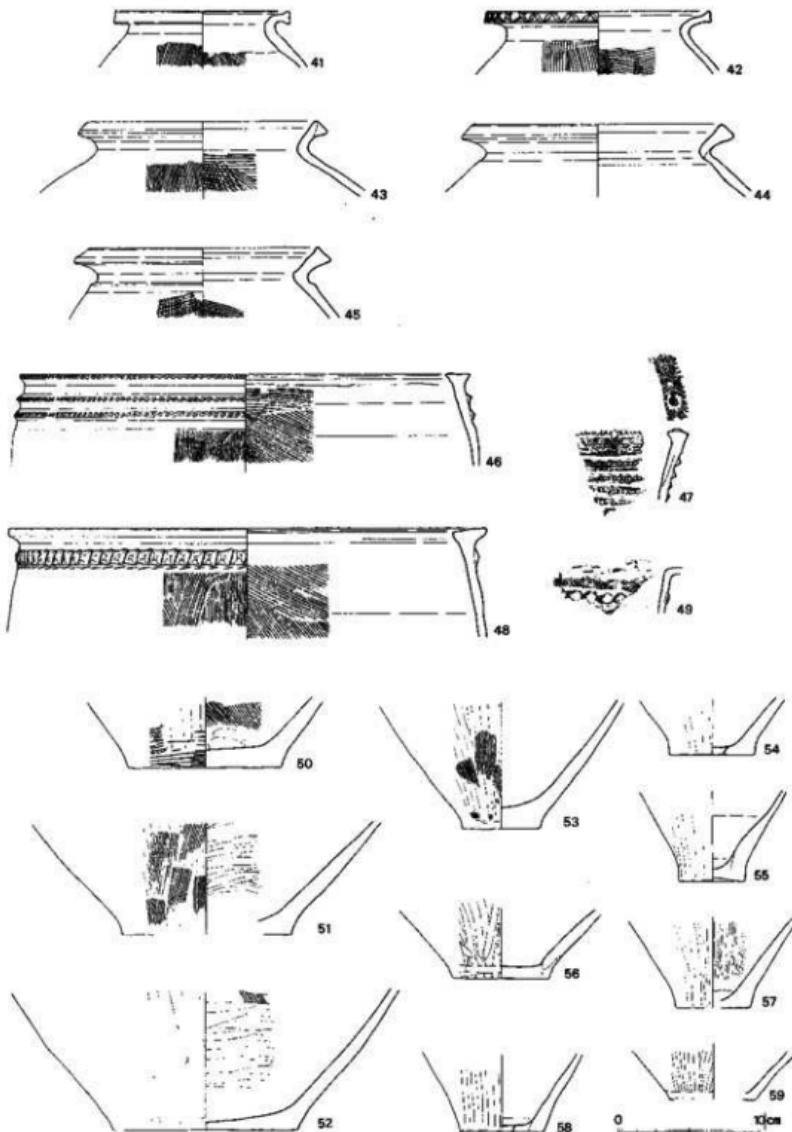
第31図 弥生土器実測図(1)



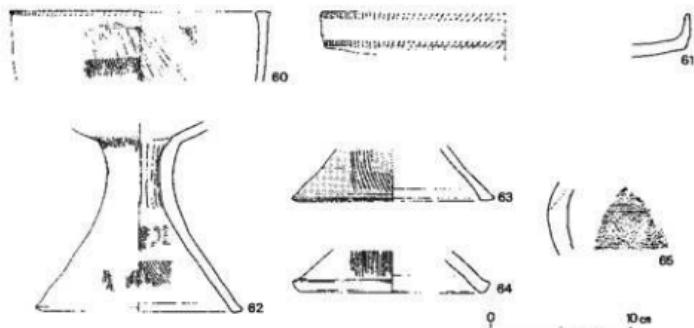
第32(2)图 仰生上器实测图(2)



第33図 弥生土器実測図(3)



第34図 弥生土器実測図(4)



第35図 弥生土器実測図(5)

胎土、色調等からみて同一個体と考えられるもので、7～10条を単位とする沈線3列の間に斜格子文、その下に斜行刺突文、円形浮文を施している。20～22も同一個体と思われ、沈線の間に斜格子文を施し、上部に波状文、下部に斜行刺突文を入れている。前2者は共に外面に赤色顔料が塗布されている。23は頸部に接する部分の破片と思われ、沈線の間に山形文が配されている。24・25は沈線の間に斜格子文を施すものと思われ、25はその下に斜行刺突文、列点文がみられる。

甕の口縁は5つに分類される。26～36はくの字形に短く屈曲する口縁を有し、端部はやや肥厚する。端部の形態には差異が認められ、32・33のように浅い凹線のあるものや、34～36のように端部が上方に引き出されているものもある。調整は内外面共、口縁は横ナデ、胴部は縱あるいは斜め方向のハケメを施している。31は底部まで復原できたもので、平底を呈し、胴部外面下半はハケメ調整の後、縱方向のヘラミガキを加えている。37～40は基本的な形態は上述のものと同様であるが、口縁の器肉が厚手で、口唇はやや肥厚している。調整は口縁は横ナデ、胴部外面に縱方向のハケメ、内面はハケメまたはナデが施されている。41・42はくの字形に短く屈曲する口縁を有するが、口唇が上下に肥厚し、くりあげ気味になっているものである。調整は口縁に横ナデ、胴部内外面に縱方向のハケメを施している。42は外面端部に斜格子文を入れている。43～45はくの字形に短く屈曲する口縁を有するが、器肉が厚く、端部が下方に肥厚するものである。調整は口縁に横ナデ、胴部内外面に縱あるいは横方向のハケメ、またはナデを加えている。46～49は無頸のものである。46は平坦な口唇部を有し、外面に2条の突帯を貼り付けて刻み目を入れている。調整は縱または横方向のハケメの後、横ナデを加えている。47は平坦な口唇の上に斜格子文と円形浮文を配し、外面には4条以上の刻み目突帯を貼り付けている。48も口唇に平坦面を有し、

外面に工具によって幅のある刻み目を入れた突帯と斜行刺突文が施されている。調整は縦または斜め方向のハケメの後、横ナデを加えている。49は口縁を短く屈曲させたもので、外面に指頭圧痕文帯を有している。

底部はやや内高になるものもあるが、すべて平底で、2種類が認められる。50～52は大形で、胴部にかけての立ち上がりが大きく開き、外面にヘラミガキやハケメ調整を施している。53～59は小形で、胴部にかけての立ち上がりは上述のものより開きが少ない。調整は縦方向のヘラミガキを主体とするが、一部にハケメ調整もみられる。50～52は壺、53～59は甕の底部になる可能性が高いものと思われる。なお、54・58には底部中央に焼成後穿孔されたと考えられる穴が観察された。

高壺は壺部、脚部共に2つに分類できる。60は底の深い壺部で、口唇に平坦面を有し、その外側に刻み目を入れる。11唇の調整は横ナデ、他は斜め方向のハケメである。61は底の浅い壺部で、短く屈曲して垂直に立ち上る口縁を有し、外面に4条の凹線と上下2段に斜行刺突文を入れる。調整は横ナデである。62・63は大きく外反する脚部で、端部に稜はつかない。外面の調整は縦方向のハケメの後、ヘラミガキ、62には筒部に紋り目も認められる。64は同様な形態をとるが、端部に稜がつくもので、外面には縦方向のハケメがある。

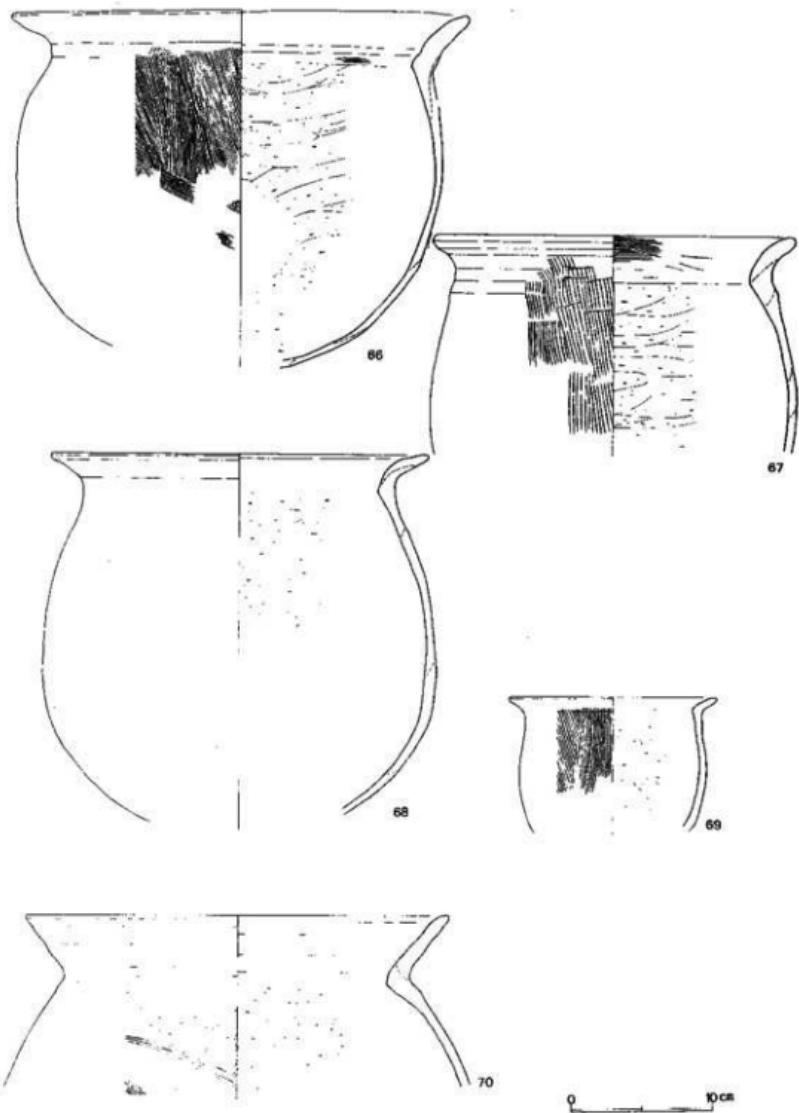
65の器種は不明であるが、6条のクシ描き沈線と1条の沈線の間に波状文を施している。

(2) 土師器、須恵器、他

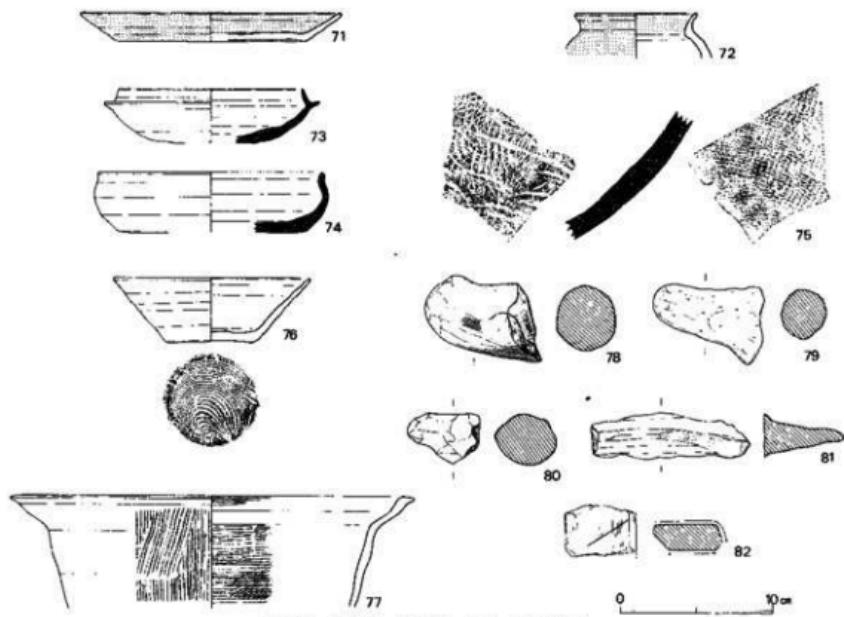
土師器には大形の甕、小形の甕、壺、小形の壺がある。

66～68・70は大形の甕である。66～68は緩く外反する口縁を有し、肩はあまり張らず、底部は丸底となっている。外面には縦方向のハケメ調整を入れ、内面には横方向のヘラケズリを施している。70は直線的に開く口縁を有し、口唇は鈍い稜をもっている。肩部は上述のものに比較すると張っており、外面に横方向のハケメ、内面に横方向のヘラケズリを施している。69は小形の甕で緩く外反する口縁を有し、肩の張りはほとんどない。外面には縦方向のヘラケズリ、内面には横方向のヘラケズリを施している。なお、内面に薄く有機物の付着が認められた。71は壺身で大きく開き直線的に立ち上がる口縁を有するもので、内外面に回転ナデを施す。口縁外面と内面には赤色顔料が塗布されている。72は小形の壺で緩く外反する口縁を有し、肩がよく張っている。調整は回転ナデで、外面と口縁内面には赤色顔料が塗布されている。

須恵器には壺と大形の甕の破片がある。73は壺身で器高は低いが、口縁内面に内傾するかえりを有している。調整は回転ナデで、外面底部の状況は自然釉のため詳細は不明であ



第36図 土師器実測図



第37図 土師器、須恵器、砥石、他実測図

る。74は壺身で、口縁は内湾して立ち上り、口唇はやや外反する。口縁内外面に回転ナデを施し、底部は回転糸切り後、粗くナデている。75は器肉の厚いもので、大型の甕の底部の破片と思われ、外面上半に平行タタキ、下半にカキメ、内面に同心円状のタタキが施されている。

土師質土器には壺と土鍋がある。76は壺身で口縁はやや外反して立ち上がり、内外面に回転ナデ調整を施す。底部は回転糸切り後、未調整である。77は土鍋で屈曲して外反する口縁を有し、外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のハケメ調整を行なっている。なお、外面には一面に煤が付着している。

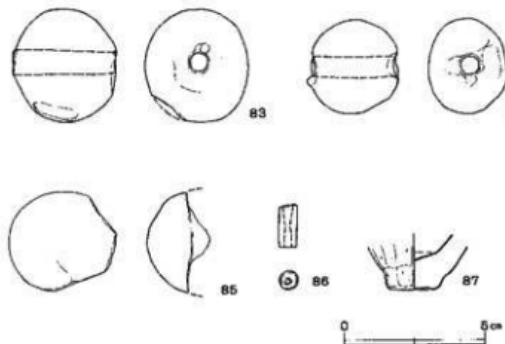
その他の遺物としては瓶の把手、甕の肩、砥石がある。78～80は瓶の把手で、78・79は把手の上面がやや上向きに反り、前者はハケメ、後者はヘラケズリによって調整されている。80は把手の上端は水平で、成形時の指頭圧痕が残っている。81は甕の肩である。82は砥石で、石材は比較的軽く、淡黄褐色を呈するものを用いている。厚さは1.8cmを測り、現状で残る3面に擦痕がある。

(3) 土製丸玉、管玉、手捏土器

土製丸玉は完形のもの2、破損したもの1の計3個である。83は径3.7~4.0cm、孔径0.8cm、84は径3.0~3.3cm、孔径0.7cmを測るもので、孔は両者共に焼成前に一方から穿孔されている。85は残片で詳細は不明である。いずれも焼成は良好、胎土は密で、色調は淡黄褐色を呈す。

管玉は質の悪い碧玉製で長さ1.5cm、径0.7cm、孔径0.2cmを測る小さなものである。穿孔は両側から行なわれたものと思われる。

手捏土器は底部の破片で、底径1.8cmを測る。外面にはヘラケズリを施し、内面には指頭圧痕が残る。胎土は密、焼成は良好で色調は淡黒褐色を呈す。



第38図 土製丸玉、管玉、手捏土器実測図

83. SD 03, 84. SD 03上面
86. SD 01, 87. SD 02

(4) 土器観察表

標図 番号	器種	法量(cm)		形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	出土地点
		口径	底径					
1	壺	30.0		外反しながら大きく開く口縁部。端部は下方に肥大する。横ナデの後、内面に波状文、斜行刻突文、外面に斜格子文を施す。	(内) 黄褐色 (外) 淡茶褐色	普通 (1mm前後の 石英、長石 を多く含む)	やや 良	SD03
2	壺	34.0		外反しながら大きく開く口縁部。端部は下方に肥大する。横ナデの後、内面は斜行刻突文、円形浮文、連續羽状文の順に施す。外面は斜格子文を施す。頭部は縱方向のハケメ。	淡黄褐色	普通 (細かい長石) (石英含む)	良	SD03上面
3	壺	40.4		外反しながら大きく開く口縁部。端部は下方に肥大する。横ナデの後、内面には斜格子文、斜行刻突文の順に施す。外面は山形文。頭部は縱方向のハケメ。内面に赤色顔料僅かに残る。	(内) 淡黒褐色 (外) 淡黄褐色	密	良	SD03上面
4	壺	35.2		外反しながら大きく開く口縁部。端部は下方に肥大。内面上端に指押による刻み目のある突帯。口縁外面上にラヘカズリ、以下縱方向のハケメ。内面は横方向のヘラミガキ。頭部に現状で4条の突帯。	淡茶褐色	普通 (2mm大までの の長石、石 英を少しき む)	良	SD07 SK02、03 上層周辺
5	壺	20.1		外反しながら大きく開く口縁部及び頭部。内面は横ナデ。外面は端部にへらによる斜行刻突文を施す。頭部は縱方向のハケメ。1条の突帯を残す。	(内) 淡茶褐色 (外) 淡茶褐色	密 (2mm大の石) (石英含む)	良	SD03上面
6	壺	25.1		外反しながら大きく開く口縁部。横ナデの後、端部に山形文。	暗褐色	普通	普通	SK04、05 上面周辺
7	壺	22.5		外反しながら大きく開く口縁部。横ナデ調整の後、端部にへらによる斜行刻突文。頭部外面に縱方向のハケメ。	灰褐色	密 (細かい長石) (石英、芸母 含む)	良	SD03
8	壺	28.0		外反しながら大きく開く口縁部。端部は上下に肥厚させる。横ナデの後、端部に羽状文。頭部は縱方向のハケメ。	黃褐色	普通 (2mm大までの の雲母、長 石、石英含 む)	良	SD01
9	壺	24.8		開きながら直線的に立ち上がる口縁部。端部は平坦面をなし、調整は横ナデ。頭部に刻み目の突帯を入れる。	(内) 黄褐色 (外) 暗褐色	普通 (3mm大までの の長石、石 英含む)	やや 良	SK02、03 北側
10	壺	21.5	10.0	くの字形に短く削り曲げる口縁部を有し、端部は肥厚する。肩部はよく盛り、底部は平底である。口縁内面はヘラミガキ。頭部は縱または斜め方向のハケメ。口縁外面は横ナデ。頭部はハケメ、削部は横方向のヘラミガキ。	明褐色 ~暗褐色	普通	良	SD03 SD04 SD07 SD08 SD10
11	壺			大きく外反する頭部。外面に3条の刻み目突帯。内面に斜行刻突文を施す。内面はヘラミガキ。外面はハケメ。	(内) 暗褐色 (外) 暗褐色	密	良	SD03
12	壺			外反する頭部。外面に2条の突帯を貼り付ける。外面はハケメ、内面はナデ。	灰白色	普通 (石英、長石) (芸母含む)	普通	SD01
13	壺			やや外反する頭部。外面に7条以上の刻み目のある突帯を施す。縱方向に粘土帶を貼りつける。	淡黄褐色	疎 (長石、石英) (多く含む)	不良	SD03
14	壺			外反する頭部。外面に工具による深い刻み目のある突帯を貼りつける。外面は横ナデ。内面はハケメ調整。	(内) 灰褐色	普通	普通	SD07 SD08

井戸番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	出土地点
		口径	底径	高さ					
15	壺				外反する頸部。外面に工具による割み口を2段に配した突起を貼り付ける。外面に縱方向のハケメ。内面は横方向のヘラミガキ調整。	(内)暗赤褐色 (外)淡茶褐色	密	良	SD10
16	壺				頸部からよく張る肩部。頸部外面に指彌王紋のある突起、肩部に斜行刻文を施す。外面は縱方向のハケメ。内面は頸部に細かい横方向のヘラミガキと指彌王紋、肩部に斜め方向のハケメ調整。	(内)淡黄褐色 (外)茶褐色	密	良	SD03 SK03上面
17	壺				外反する頸部。外面に工具による割み口のある突起を貼り付け、その下に浅い斜行刻文がある。外面は縱方向のハケメ、内面は斜め方向のヘラミガキ、及び構ナゲ調整。	暗褐色	普通 (2mm大まで) (の長石含む)	良	SD03
18	壺				よく張る肩部から胸部。クシ描きの沈線を3段に配し、その間に斜格子文を入れる。その下に2段に斜行刻文を入れた後、円形浮文を貼り付ける。外面に赤色顔料付着。	暗褐色	密 (長石多い)	良	調査区 中央南 SK02北側
19	壺				よく張る肩部から胸部。クシ描きの沈線を4条以上配置し、その間に斜格子文を入れる。この上部に淡灰文、下部に斜行刻文を加える。内面は頸部に接するとこころで横方向のヘラミガキ、以下は斜め方向のハケメ調整。外面に赤色顔料付着。	(内)暗褐色 (外)淡茶褐色	密	良	SD01 SD02
20	壺				よく張る肩部から胸部。縱方向のハケメのうち、クシによる沈線を4条以上配置し、その間に斜格子文を入れる。この上部に淡灰文、下部に斜行刻文を加える。内面は頸部に接するとこころで横方向のヘラミガキ、以下は斜め方向のハケメ調整。外面に赤色顔料付着。	(内)暗褐色 (外)淡茶褐色	密	良	SD01 SD02
21	壺				頸部に接するところの破片。外面は縱方向のハケメの後、クシ描き沈線の間に斜格子文を入れる。	暗褐色	普通 (長石、石英 多い)	普通	SK01上面
22	壺				肩部。外面は縱方向のハケメの後、クシ描き沈線、斜格子文を施す。内面はナデか。	(内)黒色 (外)暗茶褐色	普通	良	SD02
23	壺				頸部に接するところの破片。外面は縱方向のハケメの後、クシ描き沈線の間に斜格子文を入れる。	暗褐色	普通 (長石、石英 多い)	普通	SK01上面
24	壺				肩部。外面は縱方向のハケメの後、クシ描き沈線、斜格子文を施す。内面はナデか。	(内)黒色 (外)暗茶褐色	普通	良	SD02
25	壺				肩部。クシ描き沈線の間に斜格子文を入れ、その後に斜行刻文、判立文を施す。	淡黄褐色	密 (長石多い)	やや不良	SI01
26	壺	11.9			くの字形に短く屈曲する口縁。調整は不明。	淡黄褐色	普通 (長石、石英 含む)	不良	SK05
27	壺	17.8			くの字形に短く屈曲する口縁。口縁は横ナヂ、胸部内外面は斜め方向のハケメ調整。	黄褐色	密	良	SD02上面
28	壺	15.4			くの字形に短く屈曲する口縁。口縁は肥厚する。口縁は構ナヂ、外面は風化しているが、縱方向のハケメ、内面は斜め方向のハケメ。	淡褐色	密	良	SD01上面
29	壺	15.5			くの字形に短く屈曲する口縁で口縁が肥厚する。口縁は横ナヂ、内面は縱方向のハケメ、外面は風化のため不明。	暗褐色	普通 (2mm大まで) (の石英、長石 含む)	普通	SK03北側
30	壺	21.9			くの字形に短く屈曲する口縁で口縁は肥厚する。肩部が張って小さい平底の底に至る。口縁は構ナヂ、内面刻印は縱方向のハケメ。外面上半は縱方向のハケメ、下半は横方向のヘラミガキ調整。	淡黄褐色	密 (黄母、良石) (石英含む)	良	SK03北側
31	壺	17.9	5.2	29.0	くの字形に短く屈曲する口縁で口縁は肥厚する。肩部が張って小さい平底の底に至る。口縁は構ナヂ、内面刻印は縱方向のハケメ。外面上半は縱方向のハケメ、下半は横方向のヘラミガキ調整。	暗茶褐色	普通 (3mm大まで) (の石英含む)	良	SK02、03 間北側 SD02

標図番号	器種	法 量 (cm)			形 異・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼成	出土地点
		口徑	底径	器高					
32	甕	16.2			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇は肥厚する。端部には浅い凹線があくっている。口縁は横ナデ。胴部は縱方向のハケメ、内面は斜め方向のハケメ。	(内)灰褐色 (外)淡黒褐色	普通 (長石、石英) (含む)	良	SD03
33	甕	21.8			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇は肥厚する。端部には浅い凹線があくっている。口縁は横ナデ。外面は縱方向のハケメ、内面は斜め方向のハケメ。	褐色	密	良	SD02 SD03
34	甕	17.9			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇は上方にやや引き出される。口縁は横ナデ、外面は縱方向のハケメ、内面はハケメの後ナデ。	赤褐色	密	良	調査区東北
35	甕	17.2			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇は上方にやや引き出される。口縁は横ナデ、外面は縱方向のハケメ。	灰褐色	密	良	SD07
36	甕	20.2			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇は上方にやや引き出される。口縁は横ナデ。	黄褐色	密	良	SD03
37	甕	20.6			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇はやや肥厚する。器内はやや厚手である。口縁は横ナデ、外面は縱方向のハケメ。	淡黄褐色	密	良	SD03
38	甕	19.5			くの字形に短く屈曲する口縁で、器肉はやや厚手である。口縁は横ナデ、外面は縱方向のハケメ、内面はハケメの後ナデ。	淡褐色	密	良	SD06 SD07
39	甕	25.3			くの字形に短く屈曲する口縁で、器肉はやや厚手である。口縁は横ナデ、外面は縱方向のハケメ、内面はナデ。	黄灰褐色	普通 (1mm前後の 石英、長石 多く含む)	良	SD03上面
40	甕	27.3			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇はやや肥厚する。器内は厚手である。口縁は横ナデ、外面は縱方向のハケメ、内面は縱方向のハケメの後ナデである。	淡茶褐色	密	良	SD03
41	甕	12.3			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇は下方に肥厚し、くりあげ気味になる。口縁は横ナデ、内外面は縱方向のハケメ。	淡黄褐色	普通 (長石、石英) (立つ)	やや 良	SD03
42	甕	15.7			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇は上方に肥厚する。器内は厚手で、外面は縱方向のハケメ、内面は斜め方向のハケメを施す。	(内)明褐色 (外)淡茶褐色	密	良	SD03
43	甕	16.1			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇は下方に肥厚する。器内は厚手で、外面は縱方向のハケメ、内面は斜め方向のハケメ。	黄褐色	普通 (2mmの大 石、石英、 含む含む)	良	SD01 SD03 SD08
44	甕	17.5			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇は下方に肥厚する。口縁は横ナデ調整。	黄褐色	密 (黄母、石英) (長石含む)	良	SD03
45	甕	16.1			くの字形に短く屈曲する口縁で口唇は下方に肥厚する。口縁は横ナデ、外面は縱方向のハケメの後、横方向のハケメ、内面は斜め方向のハケメ。	黄褐色	密	良	SD04
46	甕	32.0			無頸のもので、口縁は平坦面をなす。外面に口縁を含めて、3条の刻み口実帶を施す。口縁は横ナデ、外面は縱方向のハケメ、内面は斜め方向のハケメ。	暗茶褐色	密	良	SK01北側

標図 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	出土地点
		口径	底径	器高					
47	甕				無頬のもので、口縁は平坦面をなす。口縁には斜格子文の後、円形浮文を貼りつけ、外側に割み目を施す。外面には4条以上の割み目突帯を加える。内面は斜め方向のハケメの後、横方向のヘラミガキ調整。	(内)灰褐色 (外)淡黄褐色	密	良	SD06上面
48	甕	33.8			無頬のもので、口縁は平坦面をなす。外面には工具により縦のある割み目を入れた突帯を貼りつけ、その下に浅い斜行削突文を入れる。口縁は横ナデ、外面は縱方向のハケメ、内面は斜め方向のハケメ調整。	淡黄褐色	密	良	SD07
49	甕				無頬のもので、口縁を短く屈曲させ、外面に指ぬき状文帯を有している。口縁は横ナデ調整。	黄褐色	密	良	SD07
50	(底部)	10.8			平底。外面は縱方向のヘラミガキののち粗いハケメ。内面は斜め方向のハケメ、ナデ調整。	灰白色	普通	良	SD03
51	(底部)	12.0			平底。外面は縱方向のヘラミガキののちハケメ。内面は横方向のヘラミガキ調整。	茶褐色	普通	良	調査区東北
52	(底部)	13.2			平底。外面は縱方向のヘラミガキ。内面はハケメの後、横方向のヘラミガキ指痕による調整。	黄褐色	密	良	SK01北側
53	(底部)	5.5			平底。外面はヘラミガキの後ハケメ、底部周辺に横ナデ。内面はナデ調整。	(内)黄褐色 (外)灰褐色	密	良	SK03北側
54	(底部)	6.1			平底。外面はヘラミガキを施すが風化のため詳細は不明。焼成後に底部中央を穿孔。	黄褐色	密	良	SK02北側
55	(底部)	4.7			平底であるが、やや内高となる。外面は風化しているが、縱方向のヘラミガキ。内面に黒斑がある。	(内)暗褐色 (外)黒褐色	密	良	SK02北側
56	(底部)	7.0			平底。外面は縱方向のヘラミガキの後、底部周辺に横方向のヘラミガキ。内面はナデ調整。	黄褐色	普通 (1mm前後の石英、長石 含む)	良	SK01上面
57	(底部)	5.2			平底。外面は縱方向のヘラミガキ。内面は縱方向のヘラミガキ、ナデを施す。	(内)黄褐色 (外)灰黑色	密	良	SD03
58	(底部)	5.8			平底。外面は縱方向のヘラミガキ。底部中央は焼成後、穿孔される。	暗褐色	普通 (4mm大までの 長石、石英含む)	やや不良	SK03上面
59	(底部)	6.0			平底。外面は縱方向のヘラミガキ。内面はナデ調整。内外面に黒斑有り。	(内)黄褐色 (外)黒色	密	良	SK05
60	高环	18.4			底の深い部分で、口唇は平坦面をなし、外側に割み目を入れる。(口縁は横ナデ、他は斜め方向のハケメである。	黄褐色	密 (石英、長石) (含む)	良	SK02北側
61	高环	26.3			底の深い部分で、口唇は短く屈曲し、垂直に立ち上がる。外面は4条の凹線を入れ、上下に斜行削突文を施す。調整は回転ナデ。	黄褐色	普通 (2mm大の石英、長石含む)	普通	SD01上面
62	高环	14.6			外反する脚部で、端部は単純なつくりとなる。脚部内面には絞り目が残る。外面は縱方向のハケメの後、ヘラミガキ。内面は斜め方向のハケメの後、ナデ。	淡黄褐色	普通 (2mm大までの石英、長石、雲母含む)	良	SD02 SD03

標番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	出土地点
		口径	底径	器高					
63	高円		14.4		外反する脚部で、端部は単純なつくり。外面は縱方向のハケメの後、ヘラミガキ。端部は横ナデ。外面に赤色耐熱塗布。	暗黄褐色	普通 (2mm大の長石、石英、 贝壳含む)	良	SK01上面
64	高坪		12.8		外反する脚部で、端部は肥厚し、棱がつく。外面は縱方向のハケメ、端部は横ナデ。外面1部に黒斑がある。	淡黄褐色	普通	良	SK03北側
65					外反する破片で6号のウシシ抹き沈線と沈線の間に沈状が入っている。調査は風化のため不明。	暗褐色	普通 (3mm大までの長石、多く含む)	やや不良	調査区東北
66	甕	32.0	(25.5)		幅く外反する口縁を有し、肩部の張りはあまりなく、底部は丸底である。外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリ、口縁は横ナデである。	淡赤褐色	普通 (1mm前後の石英、長石 を多く含む)	良	SK10
67	甕	24.8			幅く外反する口縁を有し、肩部の張りはあまりない。外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリ、口縁は横ナデである。	淡灰白色	普通 (1mm前後の石英、長石 を多く含む)	普通	SK10
68	甕	26.4			幅く外反する口縁を有し、肩部の張りはほとんどない。口縁は横ナデ、内面は横方向のヘラケズリ。外面の調整は不明。	淡赤褐色	普通 (1~2mm大の石英多く含む)	良	SK10
69	甕	14.4			幅く外反する口縁を有し、肩部の張りはほとんどない。口縁は横ナデ、外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリ調整。内面に有機物が薄く付着。外面1部に黒斑有り。	淡黄褐色	普通 (2mm大までの石英、長石 を多く含む)	良	SI01
70	甕	29.8			直線的に開く口縁を有し、口縁は鋸い穂をもつ。口縁は横ナデで、外面に横方向のハケメ、内面に横方向のヘラケズリを有する。外面1部に黒斑有り。	暗褐色	普通 (2~3mm大) (の長石多い)	良	SD03上面
71	盆	17.2	12.4	1.9	大きく開き直線的に立ち上がりる口縁を有する浅いもの。口縁外側内面に回転ナデ、底部外面にナデを施す。口縁外面及び内面全体に赤色耐熱塗布。	淡黄褐色	密	良	SD03上面
72	蓋	7.9			幅く外反する口縁を有し、よく張る肩部に至る。口縁外側内面に回転ナデ。口縁内外及び、外全体に赤色耐熱塗布。	淡黄褐色	粗密	良	SD13
73	坪	12.0	—	3.6	口縁内面に内転するかえりを有するが底は浅い。内面は回転ナデ調整で、外面には自然積がかかり、詳細は不明である。	青灰色	密	良	SD09
74	坪	14.8	12.3	4.0	口縁は内凹して立ち上がり、口唇はやや外反する。口縁外側内面に回転ナデを施し、底部は回転系切り後、粗くナデる。	青灰色	密	良	調査区東北
75	甕				器内のガいもので、底部になるものと想われる。外面は下半は平行タタキ、下半はカキメ、内面は同心円状のタタキが施される。	(内)青灰色 (外)暗褐色	密	良	SD01
76	坪	12.9	5.7	4.3	口縁はやや外反して立ち上がり、内外曲に回転ナデ調整を施す。底部は回転系切り後、本調整である。	(内)赤褐色 (外)淡赤褐色	密	普通	調査区中央南
77	鍋	26.7			口縁は既曲して外反し、外面に縱方向のハケメ、内面に横方向のハケメ調整を行なっている。外面に煤が付着。	淡褐色	密	良	SD10

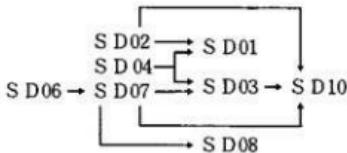
博物館番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	出土地点
		口径	底径	器高					
78	瓶				上面が上向きに反る把手で、下側はハゲメ調整。先端に指頭圧痕が残る。	淡暗褐色	普通 (長石多い)	良	SI01
79	瓶				上面が上向きに反る把手で、ヘラケズリ調整を施している。	暗褐色	普通 (2mm大の長石、石英多) (く含む)	良	SI01
80	瓶				上面は水平になる把手で、全体に成形時の指頭圧痕が残る。	褐色	普通 (含む、長石) (石英含む)	良	SD03
81	甕				肩の部分で先端はやや丸味を帯びている。割れ口の側は剥離面で、調整はナダである。	淡黄褐色	普通 (長石、石英) (含む)	良	調査K 中央南

5. 小 結

(1) 溝状遺構

溝状遺構の平面形態は直線状のものと、L字状のものの2つに分類できる。前者はSD01・02・03・04・05・06・08・09・11・12・13・15が、後者にはSD07・10・14があげられる。深さは0.1~0.2mと浅いものがSD04・05・06・10・11、0.3m程度のものがSD03・12・13・14・15、0.4m程度のものがSD07・08・09、それ以上のやや深いものがSD01・02である。断面形は2段掘りとなるSD02の1部を除けば基本的には素掘りで、底が広く平坦になるものにSD03・04・06・11、底はやや平坦となるが立ち上りの急なものにSD01・02・07・10、U字形のものにSD08・09・12・13・14があげられる。

溝状遺構は複雑な切合関係を有しているが、相互の関係を整理して示すと次のようになる。



出土遺物としては弥生時代中期の土器を中心に多数があるが、溝の掘られた時期を特定することは難かしい。SD01からは調査区北東の土壙墓群の中を通っていることもあって、弥生時代中期の土器の小片が多量に出土した。しかし、埋土中に少量ではあるが須恵器盤片も含まれており、古墳時代後期に掘られたものとみられる。多量の弥生土器や管玉は、その際に混入したものとみるのが妥当であろう。SD03は出土遺物の多くは弥生時代中期のものであった。しかし、後述するように古墳時代中・後期の出土例が多い土製丸玉や埴の把手を含んでおり、弥生時代のものと断定することはできない。SD09は古墳時代後期の蓋壺を出土しており、SD08もこれに統くものとすれば、この時期の可能性が強い。SD10からは土鍋が出土しており、また、この付近上層から土師質土器が検出された点からも中世のものと考えられる。以上は切合関係の点から考えても新しく、大過ないものと思われる。また、SD13からは赤色顔料の塗られた土師器の小形壺が出土しており、SD14には土師質土器片が含まれる等これらも新しい様相をもっている。

その他の溝については弥生時代中期の土器のみを出土しており、また、切合関係からみても古墳時代後期以前のものと思われる。SD02はその北東側で、SK04や05に切られて

いることから考えても、弥生時代中期に遡る可能性が強い。

これらの溝状遺構の性格については、例えば、水路であるとか、何らかの区画を示すものであるとか、いくつかの可能性は考えられるが、調査範囲が狭く、その様相を捉えることに限界があり、時間的に幾時代にもわたって掘り込まれたものもあるので、判断することは困難であった。但し、SD14については、溝の形状や規模、時期から考えて、1981年⁽⁵⁾の調査で検出されたような建物の周囲を囲繞する溝の可能性も考えられよう。

(2) 土壙状遺構、他

調査区の東北から、比較的密集して検出されたSK01~06は、その形状やあり方、出土遺物の点から、弥生時代中期の土壙墓と考えられる。これらの土壙墓は、SK01~03が主軸を南北に、SK04~06が東西にとっており、埋葬が行なわれた時期に差がある可能性がある。しかし、土器の特徴からみれば、その差は極めて短期間であったものと思われる。

1971年や1975年の調査でも今回の調査区の南側にあたる地点で、ほぼ同じ頃の壺棺墓、土壙墓群が検出されており、当地点周辺は広範囲に弥生時代中期の墓地が営まれていることが想定される。

また、SD01から検出された管工は、周囲に存在するであろう土壙墓の1つに本来副葬⁽⁶⁾されていたものと考えられる。⁽⁷⁾弥生時代中期中葉の共同墓地の中に、既に装身具を帯びた層と、帯びていない層が存在していたことは、この地域の社会の成り立ちを考える上で興味深いことである。

SK08は規模や深さ、底面が黄褐色土層下の灰色砂層に達していたことを考えると素掘りの井戸のようなものになる可能性がある。同様な遺構は1981年の調査でも確認されている。その他の土壙については、性格は不明である。

SI01は、調査範囲が限られているため全容は不明であるが、平面形が方形を呈し、床面には側溝が認められた。出土遺物には須恵器や土師器、瓶の把手があり、その様相からみて、古墳時代後期の竪穴式住居になる可能性があるものと考えられる。SD01のようにこの時代に掘り込まれたと思われる溝状遺構も存在し、本調査区周辺に古墳時代後期の集落跡があることも想定されよう。

(3) 遺物

弥生土器は多量に出土しているが、時間的な幅は極めて限られたものと考えられる。

壺は、基本的には①朝顔形に大きく外反する口縁を有するもの（1~8・11・12・14~17）、②口縁が開きながら直線的に立ち上がり、口唇に平坦面を有するもの（9）、③くの字形に短く屈曲する口縁を有し、端部をやや肥厚させるもの（10）、④口縁を失なって

いるが、外面に幾条もの突帯を施して、外反しながら立ち上がり、やや肥厚する口唇に至ると思われるもの⁽¹⁰⁾ (13) がある。

甕は①くの字形に短く屈曲する口縁をもち端部がやや肥厚するもの (26~45) 、②無頬のもので、口唇を平坦面にし、外面に刻み目のある突帯をめぐらせるもの (46~49) がある。

高坏は①口唇が平坦面をなし、底の深いもの (60) 、②短く屈曲して垂直に立ち上がる口縁を有し、底の浅いもの (61) がある。

壺や甕の口縁には凹線をめぐらせるものはないが、口唇があまり肥大せず装飾も少ない壺 (5~8) や、口縁がややくりあげ口縁気味になる甕 (41~45) には、若干新しい傾向が窺える。また、壺 (10) はあまり類例をみないものであるが、胴部が中程より上で張る器形や、くの字形に屈曲させた口縁の端部をやや肥厚させている点、調整手法等、他の遺物との類似点が多い。

以上の特色からみると、これらの土器はかなり多様性があり、やや新しい傾向を備えたものがあるが、弥生時代中期中葉に概ね含まれるものと思われる。

土師器甕は基本的には緩く外反する口縁を有し、肩のあまり張らない特色をもっている。このような特徴を備えた土器は古墳時代後期以降にみられるものと思われる。

土製丸玉は弥生時代中期中葉の土器と共に S D03の埋土中や上面から出土している。これらは祭祀用品として使われたものと考えられているが、県内では松江市才ノ井遺跡、同タテチョウ遺跡⁽¹¹⁾、隱岐郡西ノ島町兵庫遺跡⁽¹²⁾、同小丸山遺跡⁽¹³⁾、それに天神遺跡⁽¹⁴⁾ '78年調査区等で出土している。時期はいずれも古墳時代中期から後期にかけてのものであり、今回出土のものも溝掘削後に周辺の弥生土器と混ざり合った可能性を否定できない。

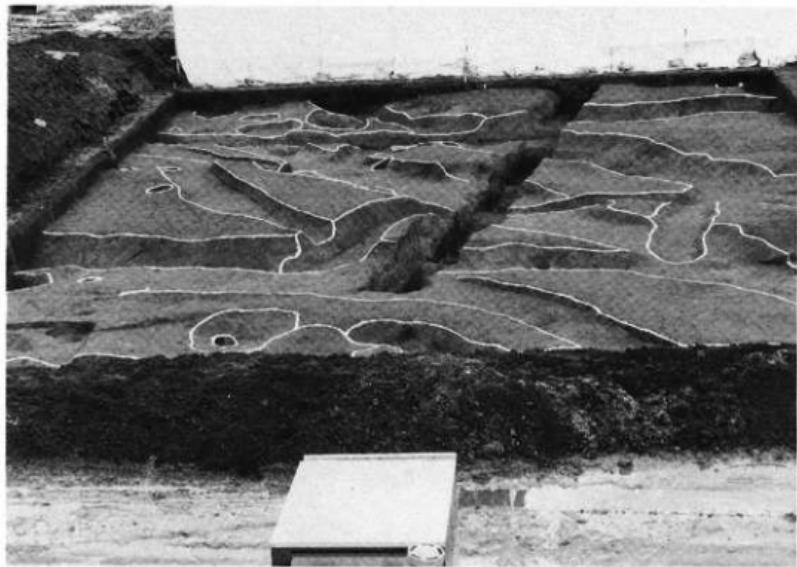
(4) おわりに

今回の発掘調査では範囲が極めて限定されていたこともあって、遺構の性格を十分に把握することができなかった。しかし、周辺には弥生時代中期中葉の大規模な共同墓地や古墳時代後期の集落跡等の存在も推定された。今後、継続的に調査を行なって遺跡の実態を明らかにし、その保護をはかると共に、地域史の重要な教材として生かしていくことが望まれる。

註

- (1) 出雲市教育委員会「出雲市天神遺跡」(1972)
- (2) 出雲市教育委員会「天神遺跡」(1977)
- (3) 出雲考古学研究会「天神遺跡の諸問題」(『古代の出雲を考える』1 1979)
- (4) 出雲市教育委員会「天神遺跡発掘調査報告書」(1982)
- (5) 註(4)と同じ
- (6) 註(1)と同じ
- (7) 註(2)と同じ
- (8) 出雲平野では土壙墓に管玉が副葬された例として、矢野遺跡のものがある。時期は
弥生時代後期前半である。出雲考古学研究会「出雲平野の集落遺跡Ⅱ」(『古代の
出雲を考える』5 1986)
- (9) 註(4)と同じ
- (10) 多聞院遺跡出土品に同様な頸部を有する壺があり、それより類推した。東森市良「知
井宮多聞院遺跡」(『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』建設省
出雲工事事務所、島根県教育委員会 1980)
- (11) 東森市良、前島己基、松本岩雄「弥生式土器集成」(『八雲立つ風土記の丘研究紀
要』I 1977)
- (12) 島根県教育委員会「才ノ峰遺跡」(『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財
発掘調査報告書』IV 1983)
- (13) 島根県教育委員会「タテチョウ遺跡発掘調査報告書』I (1979)
- (14) 勝部昭、西尾克己「隠岐島における祭祀遺跡の発掘調査」(『季刊文化財』31、19
77)
- (15) 近藤正「山陰」(『神道考古学講座』2 1972)
- (16) 註(3)と同じ

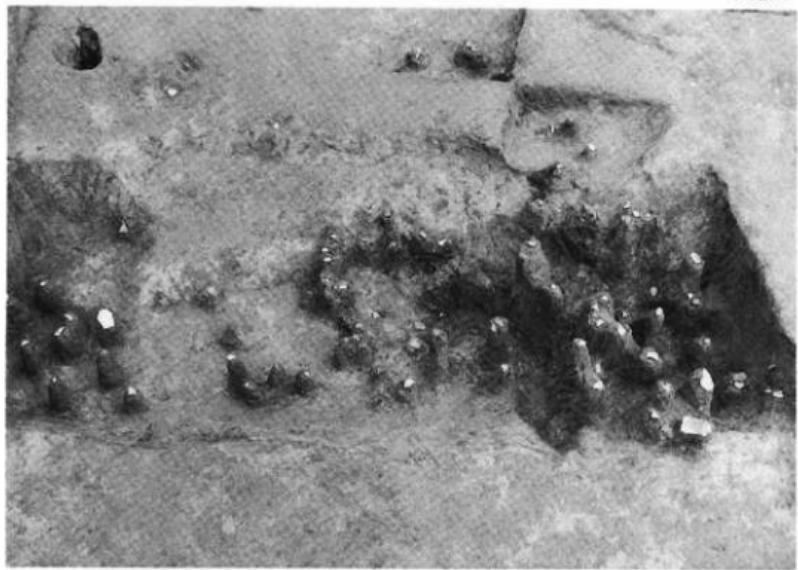
図 版



遺構全体(西から)



SD01(南から)



SD01土器出土状況（西から）



管玉出土状況



SD02 (南から)



SD03 (南から)



SD04 (西から)



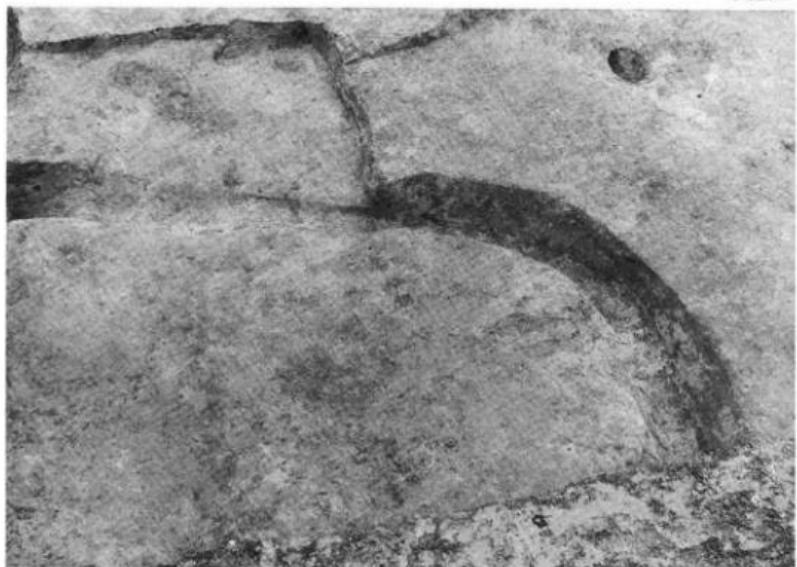
SD06 (南から)



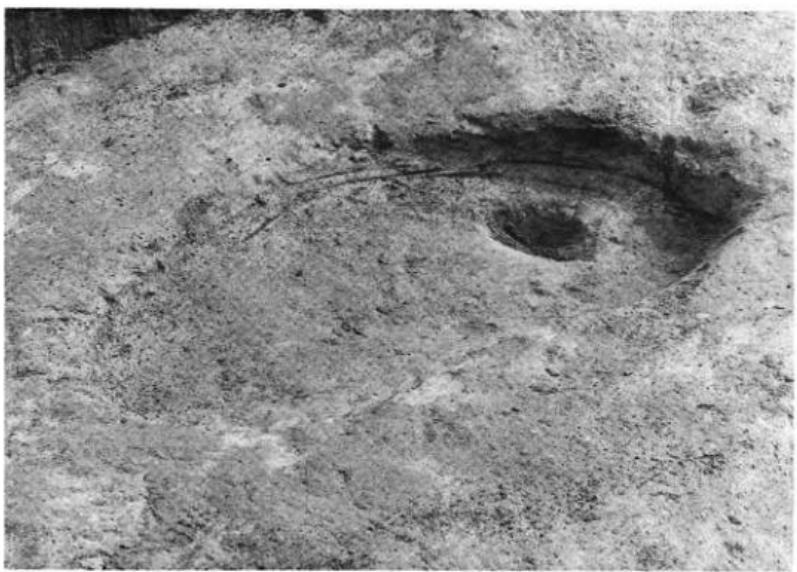
SD07 (西から)



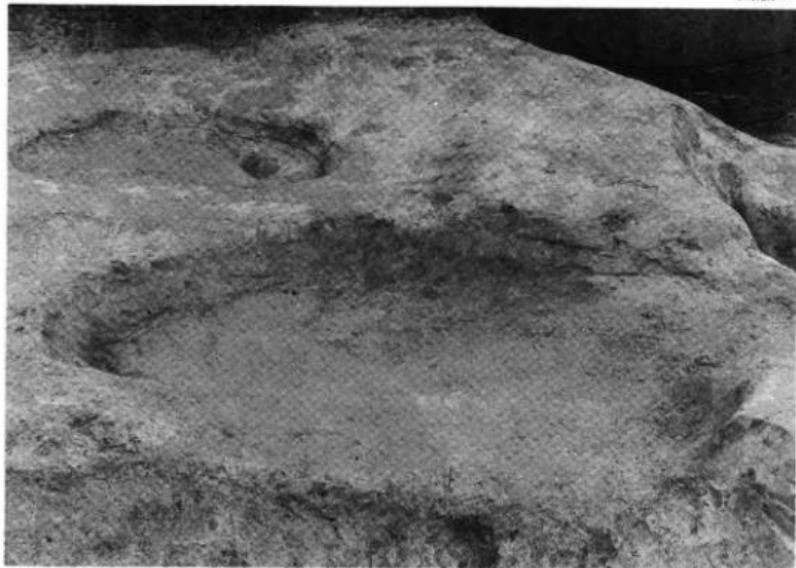
SD08 (西から)



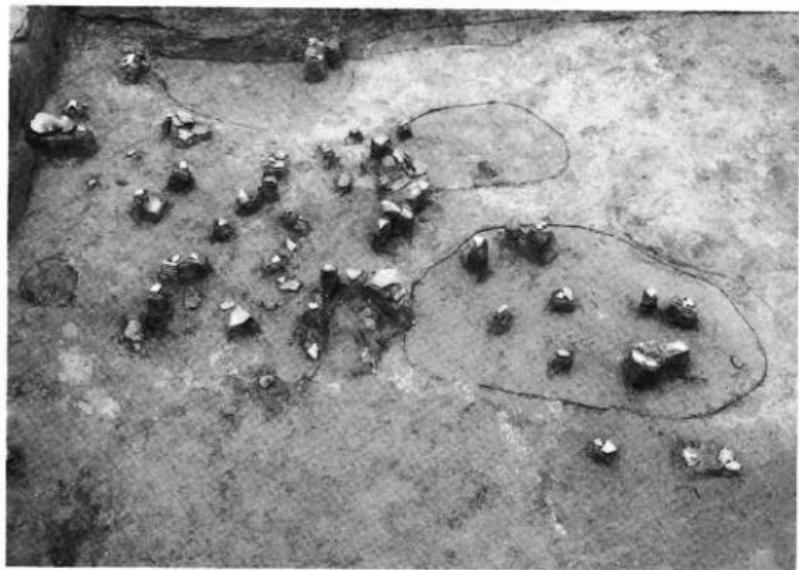
SD14 (西から)



SK02 (西から)



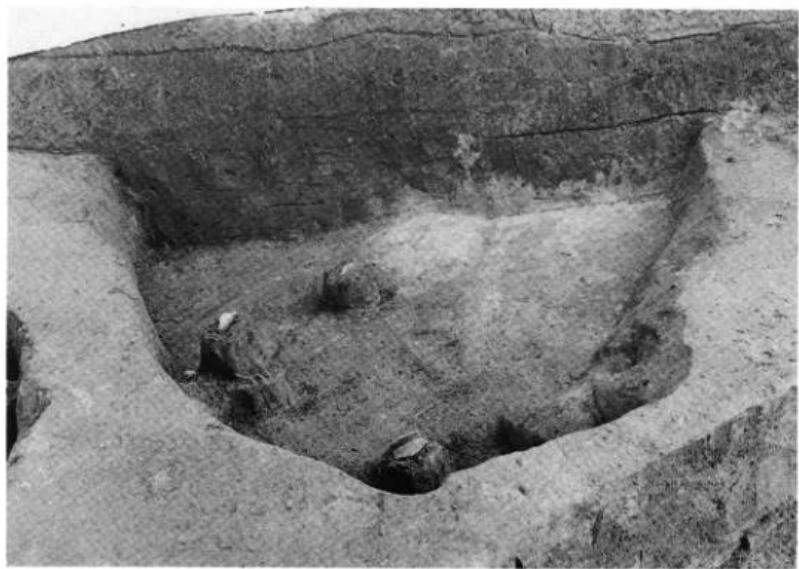
SK03 (西から)



SK01～03周辺の土器出土状況 (西から)



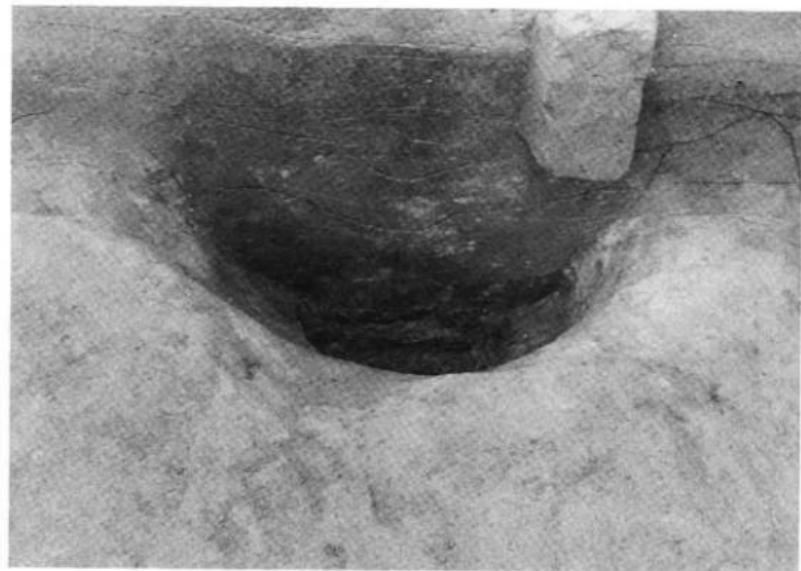
SK04 (北から)



SK05 (西から)



SK06 (北から)



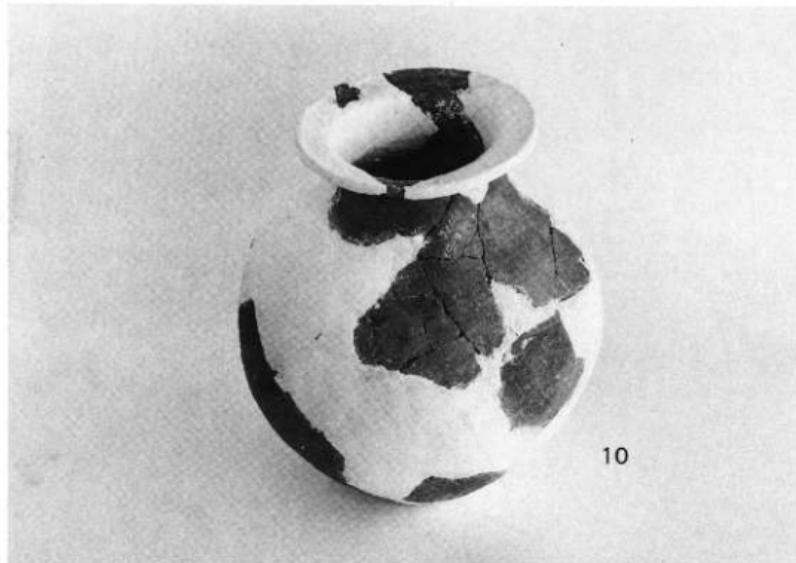
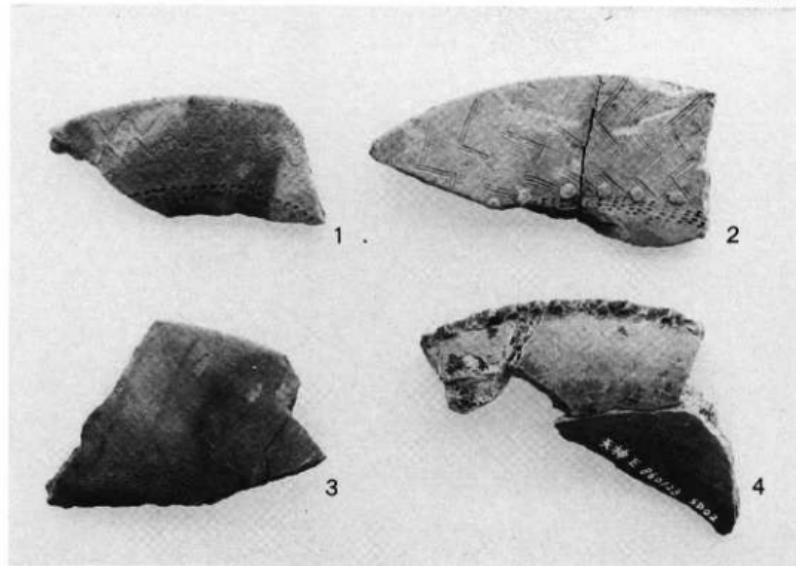
SK08 (南から)



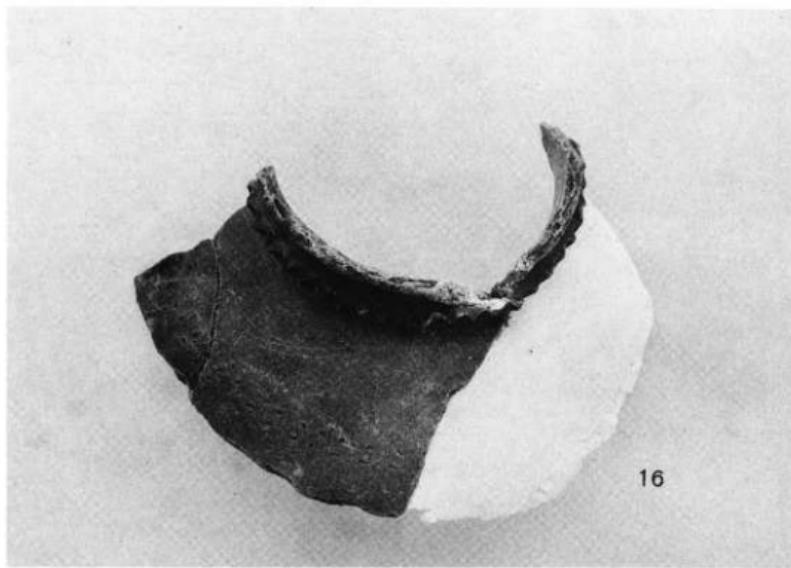
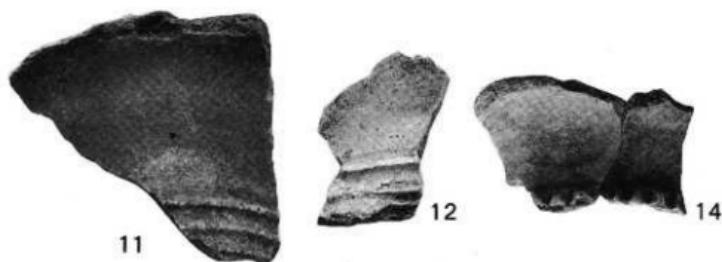
土師器甕出土状況（北から）

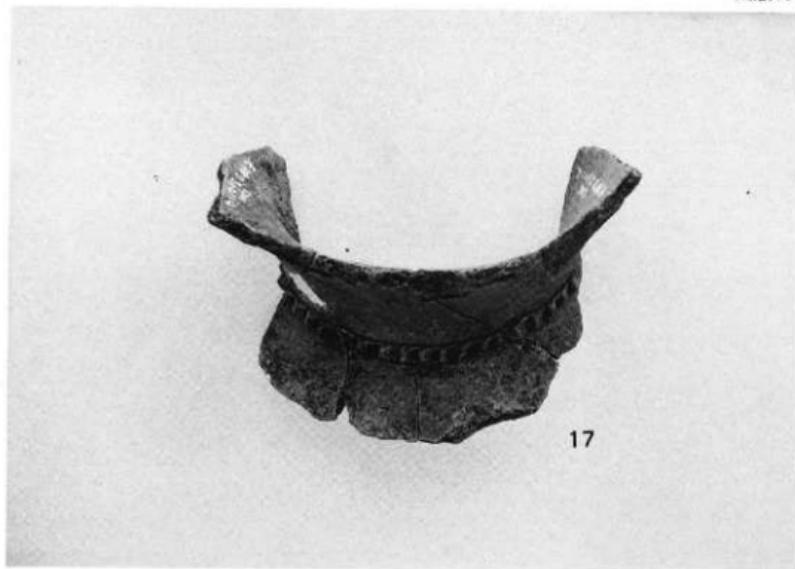


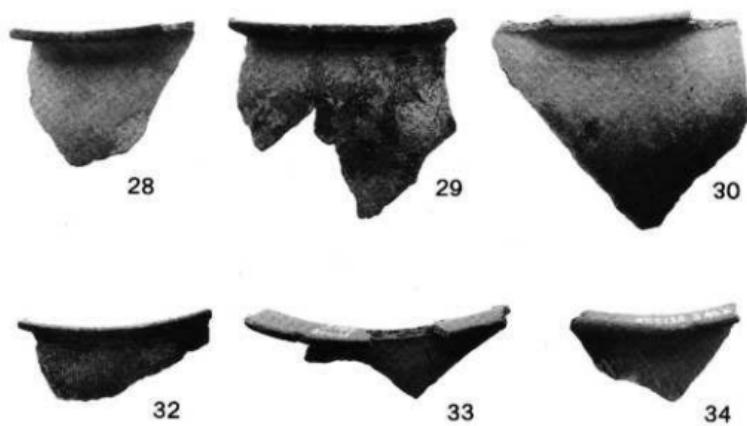
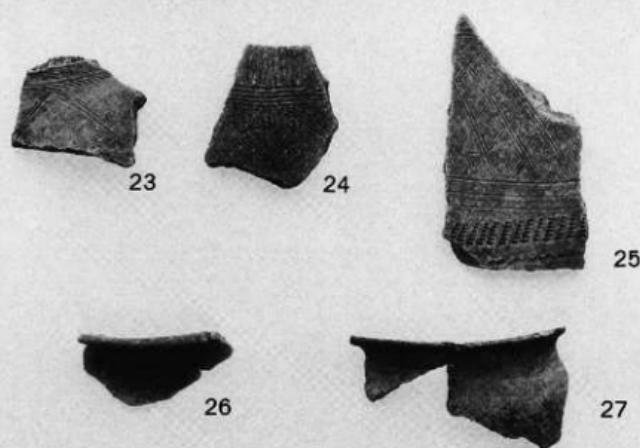
S101（南から）

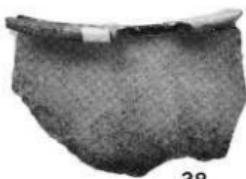


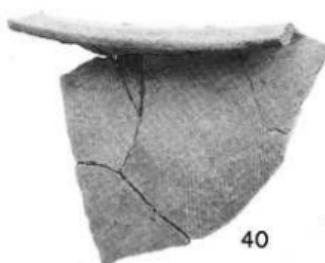
図版12









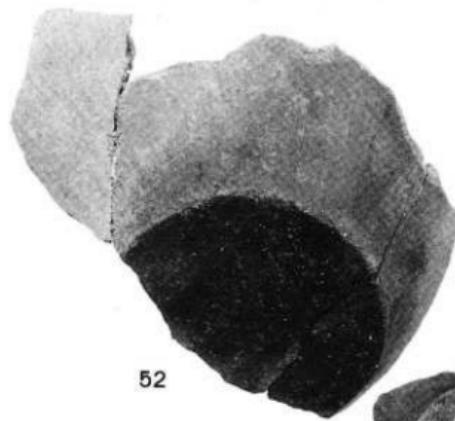




50



51



52



53



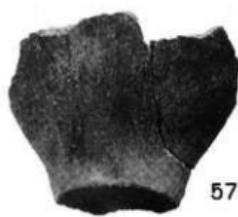
54



55



56



57



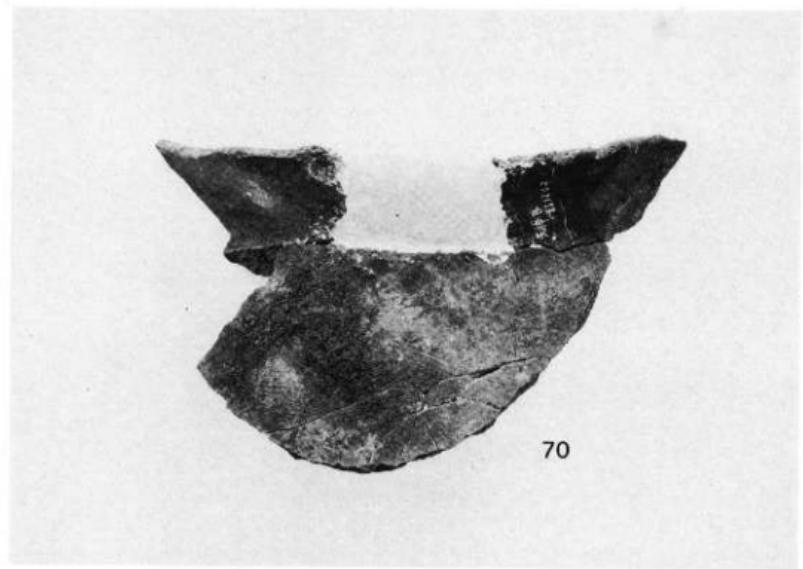
58

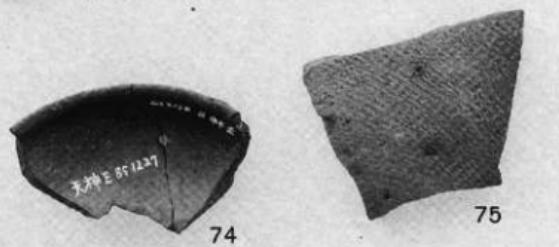


59



62







87



79



80



81



83



84



85



86



87

昭和61年3月15日 印刷

昭和61年3月25日 発行

天神遺跡発掘調査報告書IV

発行 出雲市教育委員会

印刷 伊藤印刷